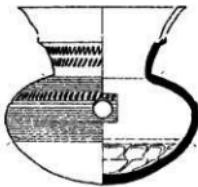


市内遺跡調査概報IV

—平成7年度、石堤長光寺遺跡・石塚遺跡・中曾根遺跡の調査—



1996年3月

高岡市教育委員会

表紙・扉カット図；石塚遺跡出土須恵器甌No5081実測図（縮尺1／3）

序

高岡市域における遺跡については、丘陵・台地部において、绳文集落跡、古墳群、城郭跡、都市遺跡等が多く見られると共に、平野部においても、主に、初期農耕文化以降の集落跡等が多く分布しています。そしてこれらの遺跡が個性ある歴史的風土や環境を形成する一部となっております。

今回ここに報告しますのは、個人住宅等の開発行為に対して実施した3箇所の遺跡、石堤長光寺遺跡、石塚遺跡、中曾根遺跡の発掘調査の内容です。

石堤長光寺遺跡は、高岡市域の西側、隣接する福岡町との境に近い、西山丘陵標部の谷間の遺跡です。往古の北陸道は、西山丘陵標部を走っており、当遺跡付近をも通っていたことが推定されます。谷間の小規模な遺跡とは言え、多くの遺物が出土し、古代北陸道の川入駅がこの付近に比定されていることから、この地域の遺跡が注目を集めています。

石塚遺跡は、高岡市街地の南西郊外に立地し、県下において、初めて初期農耕文化が確立した遺跡として、以前より著名な遺跡です。本教育委員会におきましても、ここ数年は毎年のようにこの遺跡の調査を実施しており、その内容が徐々に判明し、従来想定していたより遺跡の範囲が広いことや内容が豊かな点が判明してきています。

中曾根遺跡は、高岡市域の北東側、牧野地区の遺跡です。放生津潟の低地に望む微高地に立地しており、以前多くの遺物が出土し、地元の研究者により報告がされていましたが、近年は発掘調査を実施する機会が無く、考古学的研究が遺跡の持つ内容に比べて遅れている地区でした。しかし、本教育委員会による分布調査の実施や、隣接市町村による付近での発掘調査等により、放生津潟を囲む平野部での歴史の究明が最近進展してきました。

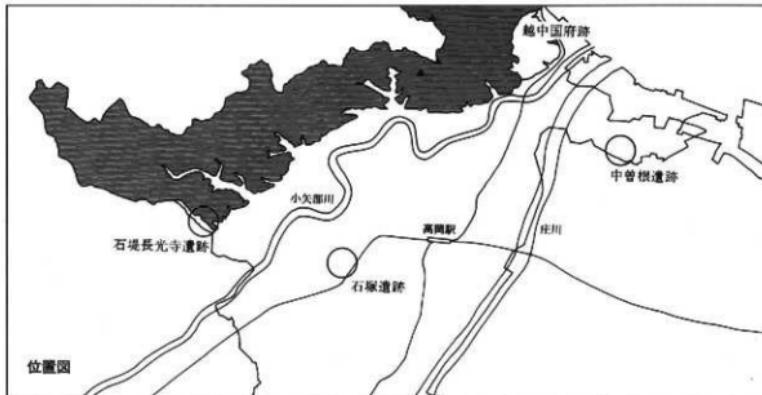
最後になりましたが、今回の調査実施にご協力頂きました、織田祥漢氏、細川俊治氏、関口恒夫氏、石浦勇一郎氏、老子善康氏、得能雄吉氏、得能浩氏を始め、関係各位、地元の皆様に厚く御礼申しあげます。

平成8年3月

高岡市教育委員会
教育長 細呂木 六良

例 言

1. 本書は、個人住宅等の建設に伴い実施した、石堤長光寺遺跡、石塚遺跡、中曾根遺跡の発掘調査の概要報告書である。
2. 当調査は、平成7年度国庫補助金の交付を受けて、高岡市教育委員会文化財課が実施した。
3. 調査地区は以下の3箇所である。
 - (1) 石堤長光寺遺跡、長光寺墓地地区
高岡市石堤中村180.181.182
 - (2) 石塚遺跡、老子地区
高岡市上北島289-2
 - (3) 中曾根遺跡、得能地区
高岡市中曾根752-3
4. 調査関係者は次のとおりである。
文化財課長：田村晴彦
〔埋蔵文化財係〕
主幹兼係長：石浦正雄
係員：山口辰一、根津明義、荒井 隆
5. 本書における遺構記号は、次のとおりである。
S A - 樋址、S D - 溝、S K - 上坑、
S X - その他の遺構
6. 本書における遺物番号は次のとおりである。
1001～石堤長光寺遺跡、弥生土器
2001～石堤長光寺遺跡、奈良平安時代の土器類
3001～石堤長光寺遺跡、その他の遺物
4001～石塚遺跡、弥生土器
5001～石塚遺跡、古墳時代の土器類
6001～石塚遺跡、奈良平安時代の土器類
7001～石塚遺跡、中世の土器類
8001～石塚遺跡、その他の遺物
9001～中曾根遺跡、弥生土器
7. 現地調査及び報告書作成において、以下の各氏より御教示・御援助を得た。(順不同、敬称略)
安念幹倫、池野正雄、齊藤 隆、境 洋子
神保孝造、橋本正春、宮田進一
(以上、富山県埋蔵文化財センター)
8. 本書の執筆分担は以下のとおりである。
 1. 石堤長光寺遺跡、長光寺墓地地区 荒井
 2. 石塚遺跡、老子地区 山口
 3. 中曾根遺跡、得能地区 荒井



目 次

序

例 言

目 次

1. 石堤長光寺遺跡、長光寺墓地地区	1
I 序 説	3
II 遺 構	5
III 遺 物	9
IV 結 語	10
2. 石塚遺跡、老子地区	11
I 序 説	13
II 遺 構	15
III 遺 物	19
IV 結 語	23
3. 中曾根遺跡、得能地区	25
I 序 説	27
II 遺 構	29
III 遺 物	31
IV 結 語	32

図面目次

- 図面1 遺物実測図 石堤長光寺遺跡 弥生土器
図面2 遺物実測図 石堤長光寺遺跡 奈良・平安時代の土師器
図面3 遺物実測図 石堤長光寺遺跡 奈良・平安時代の須恵器
図面4 遺物実測図 石堤長光寺遺跡 奈良・平安時代の須恵器
図面5 遺物実測図 石堤長光寺遺跡 奈良・平安時代の須恵器
図面6 遺物実測図 石堤長光寺遺跡 奈良・平安時代の須恵器
図面7 遺物実測図 石堤長光寺遺跡 奈良・平安時代の須恵器
図面8 遺物実測図 石堤長光寺遺跡 奈良・平安時代の須恵器
図面9 遺物実測図 石堤長光寺遺跡 奈良・平安時代の須恵器
図面10 遺物実測図 石堤長光寺遺跡 奈良・平安時代の須恵器
図面11 遺物実測図 石堤長光寺遺跡 奈良・平安時代の須恵器
図面12 遺物実測図 石堤長光寺遺跡 奈良・平安時代の須恵器
図面13 遺物実測図 石堤長光寺遺跡 土製品
図面14 遺物実測図 石塚遺跡 弥生土器
図面15 遺物実測図 石塚遺跡 弥生土器
図面16 遺物実測図 石塚遺跡 弥生土器
図面17 遺物実測図 石塚遺跡 弥生土器
図面18 遺物実測図 石塚遺跡 弥生土器
図面19 遺物実測図 石塚遺跡 弥生土器
図面20 遺物実測図 石塚遺跡 古墳時代の土師器
図面21 遺物実測図 石塚遺跡 古墳時代の土師器
図面22 遺物実測図 石塚遺跡 古墳時代の土師器
図面23 遺物実測図 石塚遺跡 古墳時代の土師器
図面24 遺物実測図 石塚遺跡 奈良・平安時代の土器類
図面25 遺物実測図 石塚遺跡 奈良・平安時代の土器類
図面26 遺物実測図 石塚遺跡 中世の土器類
図面27 遺物実測図 石塚遺跡 上製品、石製品
図面28 遺物実測図 中曾根遺跡 弥生土器

図 版 目 次

- 図版1 遺構 石堤長光寺遺跡 1. 前期調査地区全景（北西）
2. 前期調査地区全景（南西）
- 図版2 遺構 石堤長光寺遺跡 1. 後期調査地区全景（北西）
2. 後期調査地区全景（北東）
- 図版3 遺構 石堤長光寺遺跡 1. 土坑S K01全景（南東）
2. 上器窯S X01全景（北西）
3. 上器窯S X01近景（南東）
- 図版4 遺構 石堤長光寺遺跡 1. 溝S D01全景（南西）
2. 須恵器杯出土状態
3. 須恵器甕出土状態
- 図版5 遺構 石塚遺跡 1. 遠景（南上方）
2. 全景（上方）
- 図版6 遺構 石塚遺跡 1. 全景（北上方）
2. 全景（東上方）
- 図版7 遺構 石塚遺跡 1. 全景（西上方）
2. 全景（南東）
- 図版8 遺構 石塚遺跡 1. 土坑S K117全景（南東）
2. 溝S D50全景（南西）
- 図版9 遺構 石塚遺跡 1. 土坑S K111全景（西）
2. 土坑S K114全景（東）
3. 上坑S K116全景（南東）
- 図版10 遺構 石塚遺跡 1. 地震柱S X48近景（北西）
2. 土坑S K111遺物出土状態（東）
3. 四地S X47出土状態（東）
- 図版11 遺構 中曾根遺跡 1. 遠景（南西上方）
2. 全景（上方）
- 図版12 遺構 中曾根遺跡 1. 全景（南東上方）
2. 全景（北西）
- 図版13 遺物 石堤長光寺遺跡 奈良・平安時代の須恵器
- 図版14 遺物 石堤長光寺遺跡 1. 奈良・平安時代の須恵器
2. 土製品
- 図版15 遺物 石塚遺跡 弥生土器
- 図版16 遺物 石塚遺跡 弥生土器
- 図版17 遺物 石塚遺跡 占墳時代の土師器
- 図版18 遺物 石塚遺跡 1. 須恵器
2. 中世土器類
3. 土製品、石製品

挿 図 目 次

第1図 石堤長光寺遺跡位置図 (1/5万)	2
第2図 石堤長光寺遺跡調査地区位置図 (1/5,000)	3
第3図 石堤長光寺遺跡遺構図 (1/200)	6
第4図 石堤長光寺遺跡調査風景	8
第5図 石塚遺跡位置図 (1/5万)	12
第6図 石塚遺跡調査地区位置図 (1/5,000)	13
第7図 石塚遺跡遺構図 (1/200)	16
第8図 石塚遺跡門地S X47土層断面図 (1/60)	18
第9図 中曾根遺跡位置図 (1/5万)	26
第10図 中曾根遺跡調査地区位置図 (1/5,000)	27
第11図 中曾根遺跡遺構図 (1/200)	30

調査参加者名簿

発掘

上田工、尾山久美子、垣地慶子、門島信也、岡本明子、佐野實、新谷晴紀子、杉本広政、高野佳香、田畠京子
旅剛、堺原望、寺井久子、土合良子、中村恭子、広沢隆太郎、前田武國、水外一郎、宮下奈津子、山城一夫
横川真奈美、若井正之

整理

東加世子、高田えみ子、道谷美奈子、中尾賀要子、中田都子、中林靖子、橋真理子

1. 石堤長光寺遺跡、長光寺墓地地区

石堤長光寺遺跡長光寺墓地地区、目次

I 序 説	3	III 遺 物	9
II 遺 構	5	1. 弥生土器	9
1. 横溝	5	2. 奈良・平安時代の土器類	9
2. 土坑	5	3. 土製品	9
3. 溝	8		
4. 土器着	8	IV 結 語	10



第1図 石堤長光寺遺跡位置図(1/5万)

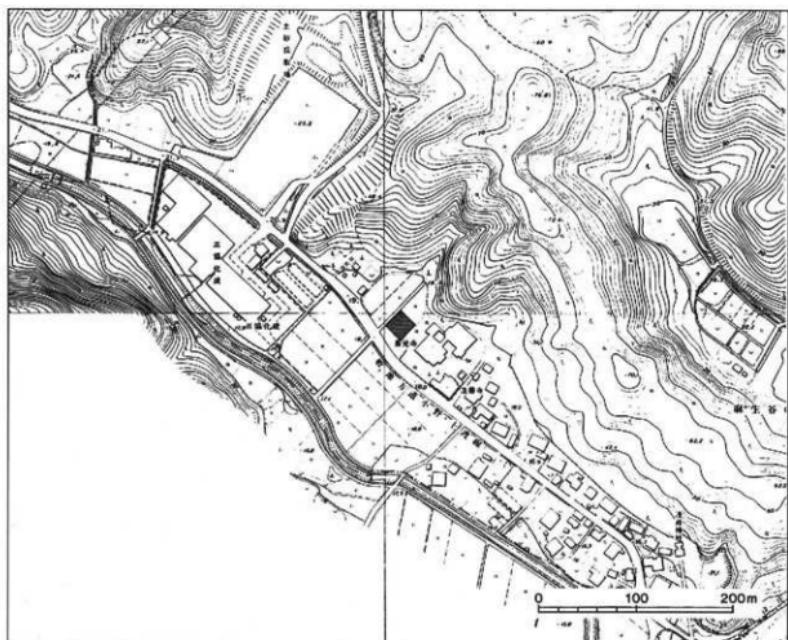
I 序 説

遺跡概観

当「石堤長光寺遺跡」は、高岡市街地の西郊JR高岡駅の西約7.0kmに位置する。遺跡の南側正面に谷内川が南東に流れ、南東側を北流する小矢部川に合流する。この高岡市と福岡町との境にあたる、標高18~19mの谷間に当遺跡が立地している。この付近は、小矢部川左岸の西山丘陵の南東山麓に形成された浸食谷の末端部に当たる。

周辺には、平野部に柴野遺跡、麻生谷遺跡などの弥生時代~平安時代を中心とした遺跡群がある。南東の丘陵上には石堤拍掌古墳群、北西には麻生谷殿谷内古墳群等が位置し、平野部の遺跡群との関係が注目される。從来より古代北陸道の駅の一つ「川入駅(川合駅)」に周辺地は比定され、小矢部市内に比定される坂本駅から、越中国府に至る交通の要地として考えられてきた。近世には、水見往来の沿線上にあり、四日市、十日市などの地名からも商業、交通の場として、立地し続けたことが何える。

遺跡の範囲は、南北126m×東西124mを計る。今回付近の現地踏査を行った結果、土師器、須恵器が多く散布しており、長光寺境内を含め、遺跡の範囲が從来より拡がることを確認した。



第2図 石堤長光寺遺跡調査地区位置図 (1/5,000)

調査に至る経緯

平成6年2月、市農業委員会からの照会で、当遺跡における農地転用と浄土真宗本願寺派長光寺による墓地の造成計画を知った。住職の織田祥漢氏、門徒總代の細川俊治氏との協議・承諾を得て、平成6年3月に試掘調査を実施した。遺構を確認するまでは至らなかったが、土師器、須恵器等の遺物が多量に出土した。これを受け、その後の協議により平成7年度に本調査を行うこととなった。調査地区は、遺跡の北西側にあり、長光寺の境内西側、現在の墓地の南側に隣接している。現在の墓地は、昭和60年に分布調査対象地に含まれているが、すでに造成されており周辺の遺物採集に止まっていた。今回が当遺跡の発掘調査として最初のものである。

調査経過

発掘調査は、平成7年6月26日から同年12月7日まで実施した。実働調査日数は62日である。表土の除去はバックフォーで行い、場内に積み上げた。耕土地の関係で、調査は北半分を先に行い、終了後に耕土を送り返し南半分の調査を行った。そこで、前後2期に分けて、交互に遺構の確認や掘り下げ、記録の作成を行った。調査地区からは湧水が断れず、水はけが悪いため、排水に多くの時間を費やした。また、包含層内の遺物の出土量が予想以上に多く、遺構の検出にも慎重を期した。このため、遺構の掘り下げなどに予想以上の手間を要し、通常より期間が長くなった。調査対象面積は544m²で、388m²の発掘を実施した。

基本層序

平均20~30cmの耕作土の下に、0~60cmの厚さで遺物包含層が堆積している。地山は、南東方向に緩やかに傾斜しながら落ち込み、黄褐色粘質土、青灰色砂質土からなる。この遺物包含層からは、比較的小規模の調査面積に関わらず、遺物が土師器、須恵器を中心にして多数出土した。遺物の出土状況は、広範囲のグリッドに接合可能な遺物が散在し、出土した土師器の全てが磨滅している。また、遺物も細片が多く、完成品に復元できる個体が比較的少ない。のことから、調査地区周辺は後世に区画整理などの地形の変化を受けている可能性がある。この包含層出土の遺物は、人為的な2次堆積の土層に含まれると想定する。

検出遺構

検出遺構は次のとおりである。

樹址2条（S A01・02）、土坑17基（S K01~17）、溝2条（S D01・02）、土器窯1基（S X01）

このほかに、ピットが多数検出されたが、深さが一定でなく、規則的配列をなすものが少ないため、建物址と認めることができなかつた。

出土遺物

出土遺物は次のとおりである。

土器・陶器類；弥生土器、土師器、須恵器、珠洲、瓦賀土器、近世陶器。

上製品；土馬、土製紡錘車、土錐。

石製品；砥石。

その他；古銭。

グリッド

調査地区的グリッドは平面直角座標系の第7座標系（原点は北緯36° 00' 00"・東経137° 10' 00"）に合わせた。東西をX軸とし、南北をY軸とした。グリッドの南西隅の数値がそのグリッドを表すものとした。X=1、Y=1の地点は、原点より、西へ20.465km、北へ82.465kmへ向かった位置である。一辺5m四方を一区画とし、グリッドを割り付け、メッシュを表示した。

II 遺構

1. 構 址

構址 S A01

南東から北西方向に延びる構址である。構址 S A02とほぼ平行に並ぶため掘立柱建物址とも考えられるが、梁方向に柱穴が検出されなかった。今後の調査次第で改めて検討される余地があると思われる。調査地区的南側で検出された。規模は3間(6.0m)以上で、南側で調査地区外に延びる可能性もある。方位は真北に対し45度西に偏っている。掘り方は不規則で梢円形となる。出土遺物は弥生土器片、土師器片である。

構址 S A02

南東から北西方向に延びる構址である。調査地区的南側で検出された。規模は2間(3.8m)以上である。方位は真北に対し45度西に偏っている。掘り方は不規則で梢円形を呈する。遺構の拡がりは、S A01同様調査地区外となり不明である。出土遺物は土師器、須恵器である。

2. 土 坑

土坑 S K01

調査地区的北側(3, 6・7)区で検出された。平面形は梢円形を呈し、規模は、長軸0.62m、短軸0.32m、深さ64cmを計る。上部は、調査地区を南東から北西に延びる溝状の擾乱に切られている。出土遺物は、土師器片である。

土坑 S K02

調査地区的東側(5, 5)区で検出された。平面形は不正梢円形で、規模は、長軸2.80m、短軸2.50m、深さは16cmである。上部を擾乱に切られている。出土遺物は土師器、須恵器である。図示したものは、2017.2045.2074.2196である。

土坑 S K03

調査地区的中央部(3, 5)区で検出された。平面形は梢円形で、規模は、長軸0.98m、短軸0.70m、深さ30cmである。出土遺物は土師器、須恵器である。

土坑 S K04

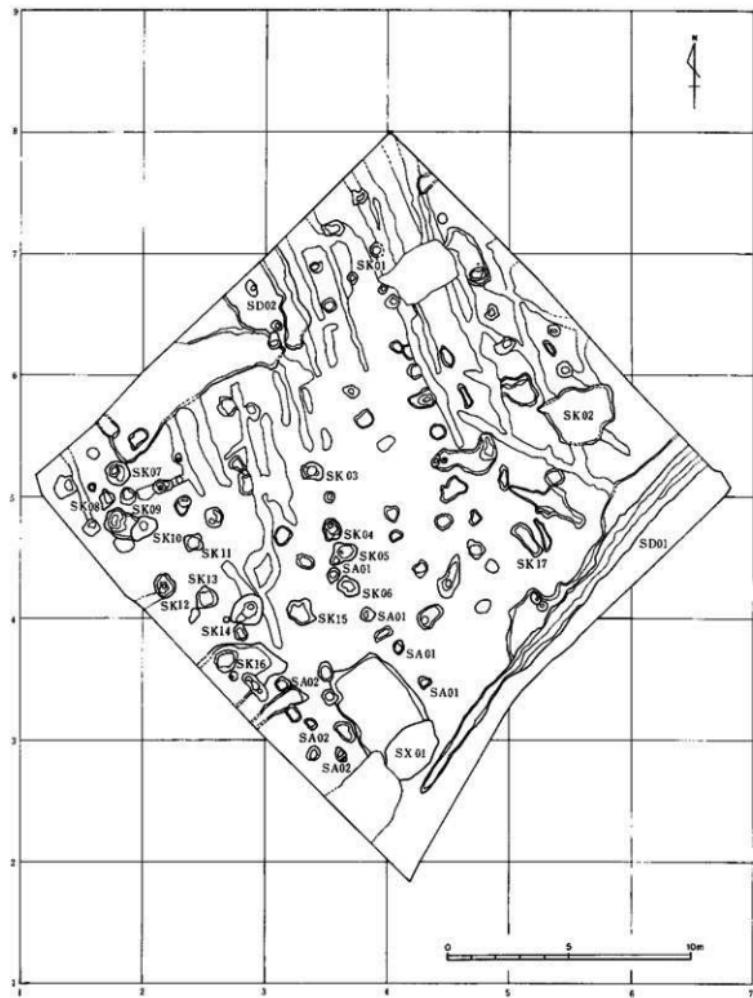
調査地区的中央部(3, 4)区で検出された。平面形は梢円形で、規模は、長軸0.93m、短軸0.78m、深さ50cmである。出土遺物は土師器、須恵器である。

土坑 S K05

調査地区的中央部(3, 4)区で検出された。平面形は不正梢円形で、規模は、長軸1.18m、短軸0.82m、深さ22cmである。出土遺物は土師器片である。

土坑 S K06

調査地区的中央部(3, 4)区で検出された。平面形は梢円形で、規模は、長軸0.98m、短軸0.70m、深さ28cmである。出土遺物は土師器、須恵器である。図示したものは、2037である。



第3図 石堤長光寺遺跡遺構図 (1/200)

土坑 S K07

調査地区的西側（1，5）区で検出された。平面形は略円形である。規模は、長軸1.00m、短軸0.94m、深さ51cmである。上部を攪乱に切られている。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器である。図示したものは、2058.2075.2225である。

土坑 S K08

調査地区的西隅部（1，4・5）区で検出された。平面形は不正楕円形で、規模は、長軸0.66m、短軸0.56m、深さ36cmである。出土遺物はない。

土坑 S K09

調査地区的西隅部（1，4）区で検出された。平面形は楕円形と想定される。規模は、長軸1.10m以上、短軸1.04m、深さ52cmである。東側をS K10に切られる。出土遺物は土師器、須恵器である。

土坑 S K10

調査地区的西隅部（1・2，4）区で検出された。平面形は不正楕円形である。規模は、長軸1.24m、短軸0.92m、深さ50cmである。西側でS K09を切っている。出土遺物は土師器片である。

土坑 S K11

調査地区的西側（2，4）区で検出された。平面形は不正楕円形である。規模は、長軸0.68m、短軸0.66m、深さ33cmである。出土遺物は土師器片である。

土坑 S K12

調査地区的南西側（2，4）区で検出された。平面形は楕円形で、規模は、長軸0.93m、短軸0.84m、深さ20cmである。出土遺物は土師器である。

土坑 S K13

調査地区的南西側（2，4）区で検出された。平面形は楕円形で、規模は、長軸0.96m、短軸0.84m、深さ36cmである。出土遺物は土師器片である。

土坑 S K14

調査地区的南西側（2，3・4）区で検出された。平面形は不正楕円形で、規模は、長軸1.42m、短軸1.13m、深さ52cmである。上部を攪乱に切られている。出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器で、最下層から須恵器杯の完成品1点が出土した。図示したものは、2040.2066.2107である。

土坑 S K15

調査地区的中央部（3，3・4）区で検出された。平面形は不正楕円形で、規模は、長軸1.20m、短軸0.99m、深さ26cmである。出土遺物は土師器である。

土坑 S K16

調査地区的南東側（2・3，3）区で検出された。平面形は不正楕円形と想定する。規模は、長軸2.42m、短軸2.18m、深さ11cmである。南西側は調査地区外となる。ピット2箇所に切られている。出土遺物は、土師器、須恵器、須恵器蓋の転用硯2点がある。図示したものは、2189.2190である。

土坑 S K17

調査地区的東側（5，4）区で検出された。平面形は楕円形で、規模は、長軸1.56m、短軸0.58m、深さ9cmである。出土遺物は土師器、須恵器で、須恵器杯の墨書き土器1点がある。図示したものは、2038である。



第4図 石堤長光寺
遺跡調査風景

3. 溝

溝 S D01

調査地区的東側で検出された南西から北東に走る溝である。規模は長さ約18m、幅30~114cm、深さ26cmである。北側は調査地区外となる。ピットに2箇所切られている。出土遺物は土師器、須恵器で、溝中央部からまとめて出土している。図示した遺物は弥生土器、土師器、須恵器である。

溝 S D02

調査地区的北東側で検出された南北に延びる溝である。規模は、長さ約4.2m、幅62~98cm、深さ24cmである。北側は調査地区外となる。南側で擾乱に切られている。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器である。図示したものは2002.2079.2158である。

4. 土器溜

土器溜 S X01

土器が多量にまとまって出土した部分を遺構として扱い S X01とした。調査地区的南側で検出された。範囲は、南北約2.6m、東西約1.8mを計る。楕円形に土器が密集し、弥生時代後期の土器群である。上部に須恵器が見られるが、包含層上層の奈良・平安時代の遺物の残りである。土器の全てが磨滅しており、他の遺物は検出できなかった。図示した遺物は、1001~1003.1005.1007~1009.1011.2111である。

III 遺 物

1. 弥生土器

弥生時代後期の土器である。図面1に1001～1012として12点図示した。壺、甕類の口縁部、底部である。

2. 奈良・平安時代の土器類

上師器及び須恵器である。図面2～12に2001～2227として227点図示した。

1. 土師器

椀A 図面2～2001.2002。椀の体・底部である。底部は糸切りしている。

椀B 図面2～2003.2004。高台付椀の底部である。2004は内面が黒色化されている。

甕 図面2～2005～2013。2005～2009は口縁端部をつまみ上げ、2010～2013は口縁端部を巻き込んでいる。

鍋 図面2～2014～2018。2014～2017は口縁端部が肥厚、つまみ上げられ、2018は口唇部に凹線がめぐる。

2. 須恵器

杯A 図面3～2019～2049、図面4～2050～2071。高台の付かない杯である。

杯B 図面5～2072～2098、図面6～2099～2127。高台付の杯である。

杯口縁部 図面4～2128～2137。杯の口縁部。2128～2133は高台付になると推定される。

杯B蓋 図面7～2138～2175、図面8～2176～2192。杯Bと組み合うとされる蓋である。2185～2192は口縁部が欠損している。口端部内面にかえりが付くものは2138のみである。

椀 図面8～2193。稜椀である。口縁部は外側に稜をなして外反して外上方へ拡がる。

皿 図面8～2194。高台杯の大型の皿である。

皿蓋 図面8～2195。大型の蓋で、皿蓋類の蓋と推定される。口径は25.0cmを計る。

鉢 図面9～2196～2220。大型の鉢で、体部は直線的に延びる。

壺・瓶 図面8～2201～2205、図面10～2206～2214。2201～2205は壺類、2206～2214は瓶類である。

壺蓋 図面8～2215～2217。特殊な蓋で、壺・瓶類の蓋と推定した。2215.2216の天井部に穿孔がある。

甕 図面10～2218.2219、図面11～2220.2221.2226、図面12～2222～2225.2227。甕の口縁部、胴部。

3. 土製品

土馬、土製筋跡車、土鍤である。図面13に3001～3011として図示した。

1. 土馬 3001。土師質である。頭部と脚下部は欠損している。足はやや開き気味で、太めの胴部を持つ。全体が磨滅して判然としないが、胴部には轍などの痕跡はなく、裸馬と思われる。

2. 土製筋跡車 3002。円盤形の筋跡車である。土器片の利用ではなく、当初より製作したものである。

3. 土鍤 3003～3011。土師質の柱状の土鍤である。他に小片で図示できなかったものが3点ある。

IV 結語

出土遺物は、複数のグリッドをまたいで接合できるものが多く、包含層出土の遺物は2次堆積の可能性が強い。また、調査地区内を南東～北西に走る溝状の痕跡と、散在するピット群がある。これらは、小規模で極めて浅く、土坑等を切ることから、遺構として取り上げず奈良～平安時代以降の擾乱とみなした。時代別に確認できた遺構の順序として、弥生時代の生活面を掘り込んで、奈良・平安時代の遺構が形成された後、墳地などによる2次堆積がなされたと認識している。

弥生時代の遺構と遺物

この時期の遺物のほとんどが、調査地区南隅部で検出された土器窓（S X01）のもので、弥生時代後期の上器群である。また、奈良・平安時代の土器の包含層より下層から検出されている。土器窓を形成する土器の中には、異なる時期のものは全く認められず、壺・壺類が主である。ほぼ全ての遺物が磨滅しており、1個体に復元できる遺物は、出土量に比べて少ない。これらの状況から、土器窓については、ある時期に一括して廃棄された土器群と考える。今回は検出できなかったが、調査地区周辺にこの時期の遺構の存在する可能性が考えられる。他には、遺構内から出土した遺物もあるが、いずれも細片で他の時期の遺物と混在しており、包含層中に散発的に高杯の破片などが見られただけである。この時期に特定できる遺構は今回検出できなかった。

奈良・平安時代の遺構と遺物

出土遺物のほとんどはこの時期を主体とし、須恵器の形態等から7世紀末～9世紀末頃のものである。ほとんどが包含層からの出土で、細片となったものが多い。須恵器、土師器の各器種とも1個体にまとまるものは出土量のわりに少ない。遺構は、柵2条（SA01・02）、土坑17基（SK01～17）、溝2条（SD01・02）である。柵址SA01・02は、調査地区南隅に位置し、遺構全体の扯がりを確認できなかった。周辺の土坑群の並び方、掘り方からは掘立柱建物址の存在を認められない。SA01・02は方向を同じくし、それぞれ平行に並ぶが、今回は双方の位置関係などから柵址とした。調査地区内の包含層中出土遺物には、壺蓋と分類した特殊な須恵器蓋が3点（図版8-2215～2217）出土した。骨蔵器の蓋になる可能性があると思うが、他の仏具関連のものかもしれない。また、水の信仰に関する遺物として土壇が包含層より単独で出土した。関連する人形等の遺物は確認できず、周囲の遺構との関係は不明である。包含層の他遺構内も含め、墨書き器が判読不明なものを持て10点出土した。須恵器の杯底部や蓋の内面に墨書きが付く。いずれも、磨滅しているため文字が判然としない。中には、「福」、「幸」、「一」と読めるものがあり、仏具に関する先の蓋類との関連が注目される。このほか、須恵器の蓋を利用した転用鏡が8点出土している。この小規模の調査範囲において、これらの遺物がまとまって出土したことは、識字層の存在が考えられる。

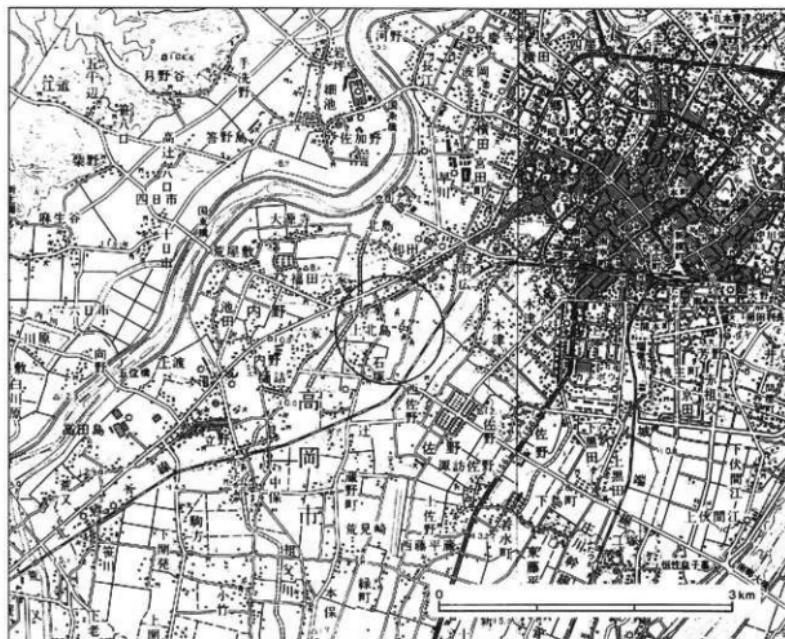
中世の遺構と遺物

中世の遺物は、包含層から散発的に出土したものである。いずれも、他の時期の遺物に混じって出土しており、全てが破片で1個体をなすものはない。遺構内からは1点も出土せず、この時期に該当する遺構は認められなかった。今回の調査の主体となる時期ではない。

2. 石塚遺跡、老子地区

石塚遺跡老子地区、目次

I 序 説	13	III 遺 物	19
II 造 構	15	1. 弥生土器	19
1. 土坑	15	2. 古墳時代の土器類	20
2. 溝	17	3. 奈良・平安時代の土器類	21
3. 凹地	18	4. 中世の土器類	21
4. 地震址	18	5. 土製品	22
		6. 石製品	22
IV 結 語	23		



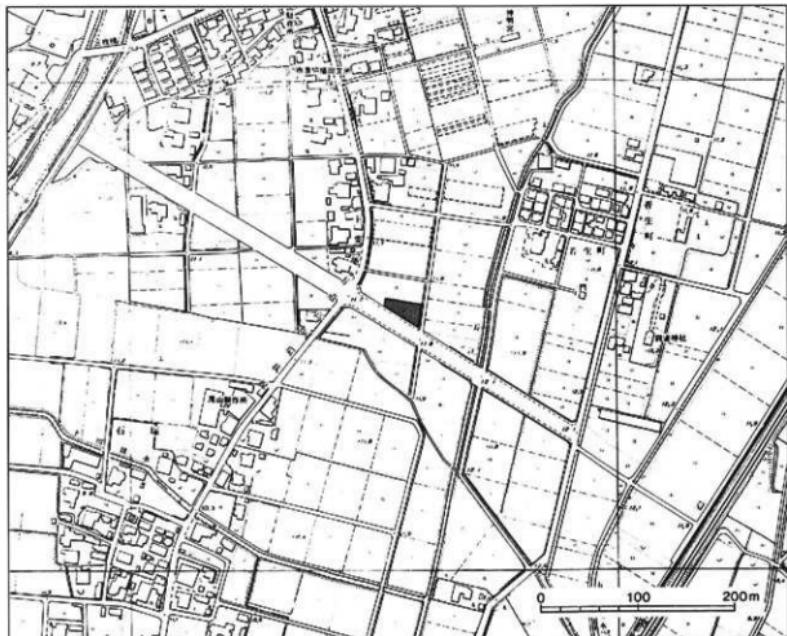
第5図 石塚遺跡位置図(1/5万)

I 序 説

遺跡概観

当「石塚遺跡」は、高岡市街地の南西郊、JR高岡駅の西南西約3.0kmに位置する。遺跡の東端部をJR北陸本線が走っている。東側には和田川が西側には祖父川がそれぞれ北流している。この両河川に挟まれた標高11~12mの微高地に当遺跡が立地している。この付近は、県西部の大河、庄川が形成した扇状地の末端部に当たる。和田川、祖父川とも、扇状地特有の湧水を水源とする河川である。

遺跡の範囲は、南北600m×東西470mを計り、当地域では最大規模の遺跡である。周囲には縄文時代晩期から中世に至る小規模集落遺跡が数箇所あり、これらに対する中核的集落であったと言えよう。当遺跡では、縄文時代晩期～弥生時代前期については、明確ではないが、それ以降、営々と生活や活動がなされたことが判明してきている。特に弥生時代中期の遺構・遺物は上記の遺跡範囲全てに存在しており、県下西部地域において初期農耕文化が初めて定着した集落跡としての評価がなされている。また近年の調査において、遺跡範囲の主に北半部において、弥生時代中期以降の遺構・遺物も多く確認されている。



第6図 石塚遺跡調査地区位置図（1/5,000）

調査に至る経緯

当該地の開発計画については、仲介の間口不動産の方から照会を受け、計画段階から連絡調整等を行ってきました。本地区は、西北西～東南東へ走る都市計画道路下伏闇江畠田線と北東～南西へ走る一般地方道立野鶴島線の交差点の東側である。遺跡範囲の北西端部にあたり、遺構・遺物は少ないものと予想されたが、試掘調査を実施する方向で協議を統一した。

その後開発計画が具体化し、平成6年2月に農地転用が出され、地主の石浦勇一郎氏と開発側の老子善康氏の承諾を得て、3月に試掘調査を実施するに至った。その結果、土坑や溝等が検出され、遺物が出土した。本調査を必要とする内容であったが、他に調査の予定箇所が数多くあり、平成6年度には実施できず、平成7年度の実施とならざるを得なかった。このことについて、老子氏を始め関係者の理解と協力を得て、本調査の実施になった。

調査経過

発掘調査は、平成7年9月1日から同年11月4日まで実施した。実働調査日数は37日である。表土の除去はバックフォーで行い、場内に積み上げた。調査地区は都市計画道路下伏闇江畠田線に面する台形の敷地で、西側が狭くなっている。表土はこの西側へ積み上げたが、遺跡範囲を探る意味も含めて、北端部は調査地区全体を通して把握するため、この部分は発掘区とした。また遺構の確認や遺構の掘り下げに伴う土は、調査地区的南端部に集めた。このため、発掘区はすっきりとした形態にはならなかった。表土除去の後、遺構確認を実施したが、現代の暗渠排水溝が数多く東西に走っており、遺構の確認をしながら、これらを掘り上げていった。そして遺構の掘り下げや記録の作成を行った。第6図の遺構図では、現代の暗渠排水溝は煩雑になるので省略してある。調査対象面積は860m²で、380m²の発掘を実施した。

検出遺構

検出遺構は以下のとおりである。遺構番号は昭和61年度の調査地区的ものからの連番となっている。

上坑11基（S K111～121）、溝8条（S D47～54）、凹地1基（S X47）、地震址1箇所（S X48）。

地震址については、遺構とすることや1箇所とする点については、異論もあるが、資料の整理と言う意味で、1箇所の遺構としておきたい。

出土遺物

出土遺物は以下のとおりである。

七器・陶磁器類；弥生土器、土師器、須恵器、綠釉陶器、瓦質土器、珠洲、瀬戸、輸入青磁。

上製品；土製紡錘車、土鍤。

石製品；管玉、石鏃。

自然遺物；骨片。

グリッド

調査地区的グリッドは平面直角座標系の第7座標系（原点は北緯36° 00' 00"・東経137° 10' 00"）に合わせた。X=1、Y=1の地点は、原点より、西へ16.235km、北へ81.255kmの位置である。遺構図のメッシュは5m区画である。

II 遺構

1. 土坑

土坑SK111

調査地区的北西側（3、5・6）区で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸2.30m、短軸0.90m、深さ50cmを計る。西側上部をSK115に切られている。またピットにも切られている。出土遺物は、弥生土器、菅玉2点（図面27-8010.8011）、石鐵2点（図面27-8014.8015）である。図示した弥生土器は、図面14-4007.4008.4011、図面16-4028、図面17-4032.4034～4036、図面19-4070.4072である。

土坑SK112

調査地区的中央部東寄り（5、3・4）区で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸2.17m、短軸0.87m、深さ42cmを計る。東側は凹地SX47とほぼ接している。出土遺物は弥生土器である。図示した弥生土器は、図面14-4009、図面15-4041、図面16-4025.4027、図面17-4037、図面18-4047.4048、図面19-4061.4069である。

土坑SK113

調査地区的南側（4、2・3）区で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸2.15m、短軸0.95m、深さ24cmを計る。北側の一部はSD52に切られている。SD54と重複するが新旧は不明確である。出土遺物は弥生土器片である。

土坑SK114

調査地区的北西隅部（1、6）区で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸1.15m、短軸0.80m、深さ62cmを計る。南東側上部をSD47に切られている。出土遺物は土師器である。図示した土師器は、図面26-7009.7012.7013である。

土坑SK115

調査地区的北西側（3、5・6）区で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸2.25m、短軸1.70m、深さ7cmを計る。SK111を切っている。出土遺物は土師器である。図示した土師器は、図面26-7016である。

土坑SK116

調査地区的西側（2・3、4）区で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸2.30m、短軸1.45m、深さ16cmを計る。出土遺物は土師器である。

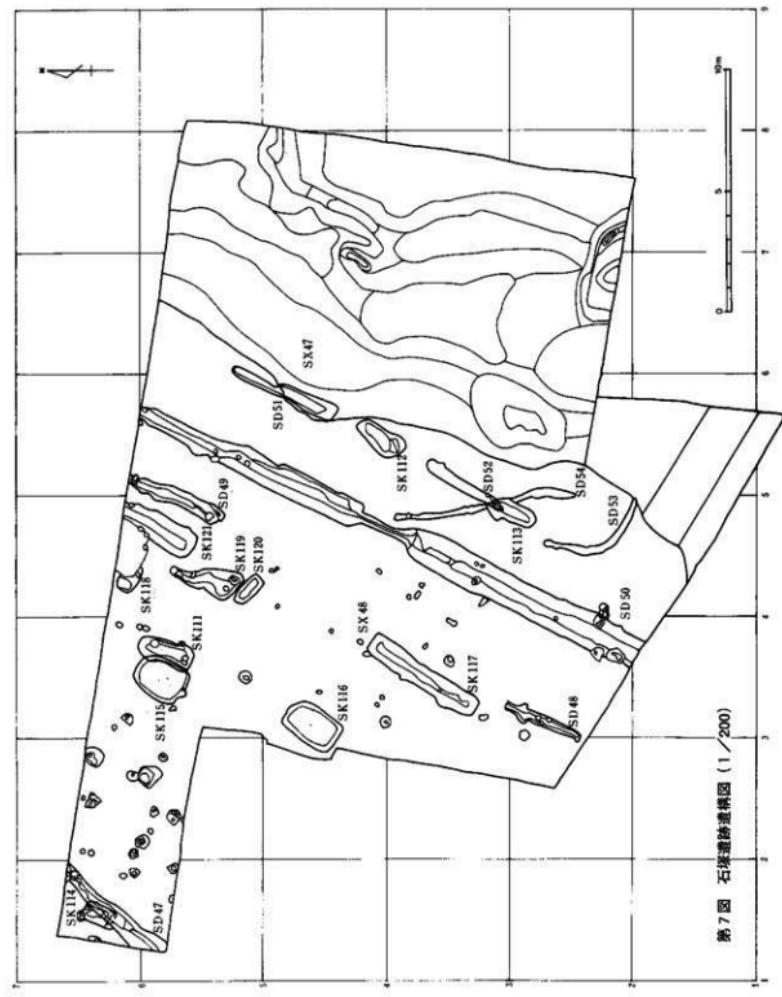
土坑SK117

調査地区的南西側（3・3、4）区で検出された。平面形は方形を呈し、規模は長軸5.10m、短軸0.90m、深さ41cmを計る。地表址SX48を切っている。出土遺物は土師器、瓦質土器である。図示した土器類は、図面26-7004.7005.7017である。

土坑SK118

調査地区的中央北端部（4、5・6）区で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸1.20m、短軸0.80m、深さ6cmを計る。攪乱に切られている。出土遺物はない。

土坑SK119



第7図 石塚地質構造図 (1/200)

調査地区の北側（4，5）区で検出された。平面形は不正形を呈し、規模は長軸2.80m、短軸1.20m、深さ15cmを計る。出土遺物はない。

土坑SK120

調査地区的北側（4，5）区で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.40m、短軸0.60m、深さ25cmを計る。出土遺物はない。

土坑SK121

調査地区的中央北端部（4，5・6）区で検出された。平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸3.25m以上、短軸1.15m、深さ36cmを計る。北側は調査地区外になる。擾乱に切られている。出土遺物は土師器、珠洲である。

2. 溝

溝SD47

調査地区的北西隅部で検出された。北東～南西方向に走る溝である。規模は幅45～90cm、深さ23cmを計る。5.20mに亘り検出され、北東側、南西側とも調査地区外へ延びている。北東側は一部ピットに切られている。SK114を切っている。出土遺物は、土師器、瓦質土器である。図示した土器類は、図面26-7006～7008.7010.7015.7018である。

溝SD48

調査地区的南西隅部で検出された。北東～南西方向に走る溝である。規模は長さ3.30m、幅30～75cm、深さ19cmを計る。ピットに切られている。出土遺物はない。

溝SD49

調査地区的中央北端部で検出された。北東～南西方向に走る溝である。規模は幅55～75cm、深さ17cmを計る。4.10mに亘り検出され、北東側は調査地区外へ延びている。ピットに切られている。

溝SD50

調査地区を東西に2区分する形で、中央部で検出された。北東～南西方向に走る溝である。規模は幅30～145cm、深さ30cmを計る。22.5mに亘り検出され、北東側、南西側とも調査地区外へ延びている。ピットに切られている。出土遺物は、土師器、瀬戸である。図示した土器類は、図面26-7002.7023である。

溝SD51

調査地区的北東側で検出された。北東～南西方向に走る溝である。規模は長さ4.50m、幅30～70cm、深さ13cmを計る。SX47を切っている。

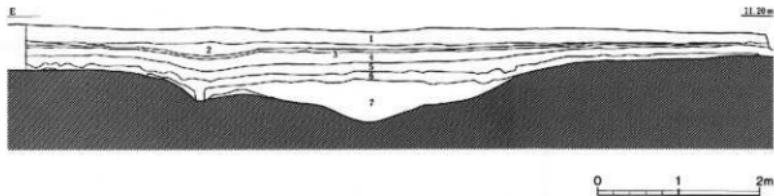
溝SD52

調査地区的南側で検出された。北東～南西方向に走る溝である。規模は長さ3.70m、幅35～50cm、深さ6cmを計る。SK113を切っている。出土遺物はない。

溝SD53

調査地区的南側で検出された。北側から東側へ湾曲する溝である。規模は幅20～30cm、深さ10cmを計る。東側はSX47に連している。出土遺物はない。

溝SD54



第8図 石塚遺跡凹地S X47土層断面図 (1/60)

調査地区の南側で検出された。ほぼ北方向に走る溝で屈曲している。規模は長さ約7.30m、幅20~25cm、深さ9cmを計る。SK113と重複するが、新旧は不明確である。出土遺物はない。

3. 四 地

凹地S X47

調査地区の東側一帯の落ち込みは、自然地形のものと判断した。単なる自然の凹凸ではなく、遺物が多く包含されており、中世段階で整地された可能性もあり、一つの遺構とした。調査地区的南東隅部は、遺構掘り下げ時等の土置場として、発掘区に含めていないが、この部分が最も深く成るようである。この土置場の北側での土層断面を第8図として示した。この図の左側が東側となる。土層は以下のとおりである。

- | | | |
|--------------------|-----------------------|------------------------|
| 1. 暗緑灰褐色シルト。 | 5. 暗褐色粘質土。 | 弥生時代、
古墳時代
の包含層。 |
| 2. 灰褐色シルト。 | 6. 暗灰色砂質土。 | |
| 3. 明褐色シルト。 | 7. 黒褐色粘質土、淡黄白色粘質土混じり。 | |
| 4. 暗灰褐色シルト。中世の包含層。 | 8. 淡黄白色粘質土(地山)。 | |

中世の遺物は第4層から、弥生時代・古墳時代の遺物は第5層以下から出土している。奈良・平安時代の遺物は、第4層及び第5層上面からの出土である。弥生時代の遺物と古墳時代の遺物とは、混在しており、層位的に出土していない。

S D51はこの第5層を切り込んで存在しており、弥生時代の土坑SK112は、一部この第5・6層に覆われていた。

4. 地震址

地震址S X48

地震の噴砂現象に伴う砂脈が検出された。ここで遺構名を付けて、整理しているのは、これがSK117に切られており、下限が明確だからである。中世乃至これ以前のものである。

III 遺 物

1. 弥生土器

弥生上器は土坑からと、凹地S X47から出土している。図面14~19に、4001~4072として72点図示した。
鉢 図面15~4001~4002は両方とも全体の形態が不明だが、鉢としたものである。4001は肥厚する口端部を持つ。ここに櫛描羽条列点文が付く。4002は…広口杯鉢の台部と考えた。

壺A 図面14~4003~4010。口縁部が外上方へ開くものである。4010以外は口端部を中心に櫛描文が付く。4006の頸部には櫛描直線文が確認できる。

壺B 図面14~4011。口縁部が僅かに外上方に拡がるものである。

壺C 図面14~4012。小型の壺で、口縁部は外反して外上方に拡がるものである。

壺D 図面14~4013。口縁部が内傾気味に直立するものである。

壺E 図面14~4014。口縁部が受口状に直立するものである。

壺F 図面14~4015。無頸壺。口端部外面に櫛描羽条列点文が付く。また透かし孔が2個付く。

壺胴底部 図面15~4016~4022。壺の胴底部乃至底部である。4016は4015のような無頸壺の胴底部になる可能性がある。

壺A 図面16~4023~4030。胴部最大径が口縁部径より小さくなるものである。乃至全体の形態が不明だが、このようなものになると類推したものである。口縁部は外反して外上方へ拡がる。肩部の張りは弱い。口縁部を欠損している4024以外、口端部に櫛描文が付く。4028は口端部内面に2つ1組の瘤が付く。また、4025.4026.4028は胴部にも、櫛描文が付く。4025は直線文と簾状文、4026は直線文、4028は直線文・簾状網形文である。大きさは、通有のものである口径15.6~19.0cmを計る4023.4025~4028と、小型で口径が14.5と13.7cmをはかる4029と4030である。後者は器壁も薄い。調整手法は刷毛目が基調である。

壺B 図面17~4031~4039。胴部最大径が口縁部径より小さいが、口縁部径に近い大きさとなるものである。乃至全体の形態が不明だがこのようになると類推したものである。口縁部は外反して外上方へ拡がる。肩部の張りは弱い。口端部の装飾は櫛描文が付くものと付かないものとがある。前者は4031~4036で、後者は4037~4039である。大きさからは、口径24.7~27.0cmを計る大型の4031.4032.4038。通有の大きさである、口径17.9~22.0cmの4033~4035.4037~4039。小型で口径12.2cmの4036と区分できる。調整手法は刷毛目によるものが基調となっている。

壺B 図面15~4040~4043。胴部最大径が口縁部径より大きいもの。乃至全体の形態が不明だがこのようになると類推したものである。口縁部は外反して外上方へ拡がる。肩部はやや張る。口端部に櫛描文は付かない。大きさからは、口径30.0cmを計る大型の4043と口径18.4~22.7cmの通有の4040~4042に区分される。調整手法は刷毛目によるものが基調となっている。

壺口縁部 図面18~4044~4052。口縁部のみの破片で、胴部最大径との関係の類推が困難なもの。口縁部は外反して外上方へ拡がる。口端部の装飾は櫛描文が付くものと付かないものとがある。前者は4044~4050で、後者は4051.4052である。大きさからは、口径22.6~25.6cmの人型乃至や大型の4044.4045.4051。通有の大きさで、口径19.0~21.6cmの4046~4048.4052。小型で口径が17.2と12.0cmの4049.4050である。調整手法は刷毛目によるものが基調となっている。

要脇底部 図面18-4053、図面17-4054。口縁部を欠損している4053と口縁部と底部を欠損している4054である。

要底部 図面19-4055~4071。要の底部で、安定した平底となっている。4069~4071は小さな底部で下方へ突出気味となっている。4061の底面には木葉文が付く。

瓶 図面19-4072。瓶の底部で、中央に小さな孔が付く。

2. 古墳時代の土器類

十師器と須恵器で、すべて円地 S X47から出土している。土師器は図面20~23に、5001~5080として80点図示した。須恵器は表紙カットとして示した図5081の1点のみである。

1. 土師器

高杯A 図面20-5001~5003。高杯の分類については、全体の形態が判明するものが少ないとあり、脚部により分類したが、この一群のみ杯部による分類である。この高杯は外面に明確な稜が付き、内面に段をなして外上方へ拡がるものである。

高杯B 図面20-5004~5016。脚部は筒形の柱状部に屈曲して外方に開く裾部が付く形態である。杯部は外面に後をなした後、僅かに内寄り気味に外上方に拡がる。

高杯C 図面21-5017~5023。高杯Bと高杯Dの中間の脚部をもつものである。

高杯D 図面21-5024~5030。「八」の字状に開く脚部をもつもの。

高杯の杯部 図面20-5031~5033。高杯の杯部。

椀 図面22-5034・5035。丸い体部より口縁部は外反して外上方へ拡がる。口縁部は横ナナ、体部はナナである。5034の外面は一部ヘラ磨きされている可能性もある。5035の内面は赤彩されている可能性がある。両者とも底部を欠損している。脚台が付く可能性を否定できないが、一応椀としておく。

壺 図面21-5036~5038。小型壺以外の壺である。直口壺の5036と複合口縁壺の5037、そして壺の平底の底部の5038である。

小型壺 図面21-5039~5045。いわゆる「小型丸底壺」である。偏球形の胴部に内寄り気味に外上方に拡がるやや大きい口縁部が付く。口縁部径は7.9~9.7cm、胴部最大径は8.7~11.6cmを計る。5044・5055の底部は揚げ底となっている。

甕 図面22-5046~5060、図面23-5061~5078。細部の違いや法量にやや統一性が欠ける点があるが、同類のものと言い得る甕の一類である。全体の形態が判明するものは小型の2点のみであるが、次のように理解している。形態は、球形の胴部より、口縁部は外反して外上方に短く拡がる。底部は丸底である。器壁は厚い。調整手法は、口縁部が横ナナ、胴部内面がヘラ削りが主体、胴部外面が刷毛目である。調整手法が粗雑で粘土紐の巻き上げ痕跡が多く付いている。法量からは一応以下のように分類したが、法量的には小型品から大型品まで漸移的に変化しており、明瞭なものではない。

a類、口径21.2~21.6cm。5046~5048の3点。

b類、口径19.3~19.8cm。5049~5051の3点。

c類、口径14.5~18.0cm。5052~5065の14点。

d類、口径11.8~13.6cm。5066~5072の7点。

e 類。口径8.8cm。5073の1点。
上記の残りの5点、5074～5078は、この壺の胴底部としたものである。

手づくね土器 図面22-5079.5080。深鉢形のミニチュア土器である。

2. 須恵器

甕 表紙カットで示した須恵器甕、5081である。

3. 奈良・平安時代の土器類

土師器、須恵器、綠釉陶器である。土師器は図面24-6001～6016.6021～6028、図面25-6017～6020として28点図示した。須恵器は図面25-6029～6049として21点図示した。綠釉陶器は図面25-6050である。

1. 土師器

椀 図面24-6001～6016。ロクロ使用の椀である。口径は10.9～16.0cmを計る。全体の形態が判明するものはない。6001～6005は口縁部、6006は底底部、6007～6016は底部である。

甕 図面25-6017～6020。壺の口縁部である。口径は15.2～24.8cmを計る。

鍋 図面24-6021～6028。鍋の口縁部である。口径は24.5～38.0cmを計る。

2. 須恵器

杯H 図面25-6029。受部の付く杯身である。口径は12.2cmである。飛鳥時代のものであるが、1点のみであり、便宜的にこの項に入れた。

杯A 図面25-6030.6031。高台の付かない杯身の底部である。

杯B 国面25-6032～6035。高台付の杯身の底部である。

杯口縁部 国面25-6036～6039。杯身の口縁部である。杯Aか杯Bになるものである。

杯B蓋 国面25-6040～6043。杯蓋である。6040はつまみ部と犬井部片、6041～6043が口縁部片である。

碗 国面25-6044.6045。碗の口縁・体部片である。

皿蓋 国面25-6046。大型の蓋で、皿盤類の蓋と考えた。口径は30.0cmを計る。

瓶 国面25-6047.6048。瓶頸の底部片である。

甕 国面25-6049。中型の甕の口縁部片である。

3. 緑釉陶器

椀 国面25-6050。緑釉陶器の椀の口縁部片と考えたもので、風化しており、残存状態はよくない。

4. 中世の土器類

土師器、瓦質土器、珠洲、瀬戸、青磁である。国面26に7001～7024として24点図示した。

1. 土師器

皿 国面26-7001～7016。非ロクロの土師器の小皿である。

2. 瓦質土器

鉢 国面26-7017.7018。火鉢と考えられる瓦質土器である。

3. 珠洲

擂鉢 図面26-7019.7020。擂鉢の口縁部片7019と底部片7020である。

甌 図面26-7021.7022。甌の口縁部片である。

4. 濑戸

瓶 図面26-7023。瓶の体底部片で、鉄釉が付く。

5. 青磁

椀 図面26-7024。輸入青磁の椀である。

5. 土製品

土製紡錘車と土鍤である。図面27-8001～8009として示した。土鍤8008がS D50から出土している以外、凹地S X47からの出土である。

土製紡錘車 図面27-8001。土器片再利用の紡錘車である。弥生土器と推定される。径3.2cm、厚さ0.9cm、孔径0.3～0.6cmである。

土鍤 図面27-8002～8009。土師質で管状の土鍤である。

6. 石製品

管玉と石鍤である。図面27-8010～8016として示した。S K111と凹地S X47から出土している。

管玉 図面27-8010～8013。緑色凝灰岩製の細型管玉である。図面27では、8010のみ2倍のスケールで示したが、他は実大である。個別的には以下のとおりである。

8010；径2mm、長さ4mm、孔径1mm。約2分の1残存、淡緑色。

8011；径3mm、長さ12mm、孔径1mm。完存品、濃緑色。

8012；径5mm、長さ14mm、孔径2mm。完存品、濃緑色。

8013；径4.5mm、長さ29mm、孔径2mm。完存品、濃緑色。

石鍤 図面27-8014～8016。

8014；無茎式石鍤。長さ3.4cm、幅2.1cm、厚さ5mm。

8015；有茎式石鍤。長さ1.9cm、幅1.4cm、厚さ5mm。

8016；石鍤の欠損品。現存長さ2.2cm、幅1.4cm、厚さ5mm。

IV 結語

概要

石塚遺跡は弥生時代中期の集落跡として著名であり、該期の遺構・遺物が顕著で確認される範囲も広く、量的にも多いものである。今回の調査地区は、弥生時代中期の遺跡としては北西側範囲境界付近である。この地点における遺跡内容や遺跡の範囲を決める上で興味を濶かせるものであった。調査の結果、弥生時代中期の遺跡はもとより、古墳時代中期のまとまった上器群の出土や、飛鳥時代～平安時代の土器類の出土、中世の遺跡も確認され、内容が豊かなものであった。

検出遺構

検出遺構は、土坑、溝、凹地、地震帯である。また大小のビットも多数検出されている。土坑・溝については、弥生時代のものと中世のものとに区分される。弥生時代は中期、中世は南北朝～室町時代である。それぞれについてのとおりである。

弥生時代：S K111～113、S D54。

中世：S K114～121、S D47～53。

弥生時代中期の遺跡

石塚遺跡の範囲等を述べる場合、それは弥生時代中期のものを基本としている。これはこの時代のものが量的に多いこともあるが、現在確認している限りにおいて、石塚遺跡の範囲内すべてから、この弥生時代中期のものを確認しているからである。今回の調査地区は遺跡の北西側範囲境界付近であり、遺構・遺物ともに少ないものと予想していたが、相当量の遺構の検出や出土遺物をみたことは、当該期の集落がさらに北西側に拡がることが確実視されることになった。

古墳時代中期の土器類

凹地S X47から古墳時代中期の土器がまとまって出土した。明確な造構からの一括遺物ではなく、單一時期の遺物包含層からの出土ではない。しかし、量的にも多く、ほぼ一時期の良好な上器群と判断される。内容は初期須恵器1点と他は整理箱約5箱分の土師器である。初期須恵器は題である。陶邑編年須恵器TK208に比定してよいと思われる。上器器は、高杯、楕、壺、小型壺、壺（小型壺～大型壺）、手づくね土器で80点図示した。これらの土師器については、須恵器と同時期のものと判断した。この時期の土器群について、類似する資料を瞥見するに、石川県の漆町遺跡における第13群土器群がある（田島1986）。この土器群はTK208段階のものとされている。また同じく石川県下の資料として、金丸宮地遺跡の宮地A群土器がある（吉岡1991）。県内においては、小矢部市道林寺遺跡第3号住居址出土土器群があり、漆町遺跡第13群土器群に匹敵するものとされている（伊藤1987）。この土器群の特徴として次のように指摘されている。①布留系の壺を含まないこと、②高杯が前代までの規制が崩れ弛緩した形態をとること、③小型丸底壺がみられないこと、④多様な楕形土器が使用されるようになっていること、⑤楕形土器の内面を黒色処理するものが含まれていないこと、⑥初期須恵器が伴うこと。今回の石塚遺跡の土器群と道林寺遺跡第3号住居址出土土器群を比較するに上記した6つの要素の内、①、②、⑤、⑥については石塚遺跡土器群にも該当する要素である。③と④については右坂遺跡土器群では該当しないものである。小型丸底壺は存在する。また楕については図示したものが2点であることが示しているように、数少ない。これらのこととは、石塚遺跡の土器群の方が道林寺遺跡土器群より古い様相を示していると言え得る。

中世の遺跡

石塚遺跡における中世の遺構・遺物については、遺跡範囲の南側地区でも一部は認められるが、当調査地区を含め、北側地区がより多く、明確なものが確認されている。東方については、当調査地区的東南東側約200mの地点まで掘ることが過去の調査ではっきりしている。西方については、当遺跡の北西側に位置する石塚江之戸遺跡の中世の遺構・遺物に繋がる可能性が強い。石塚江之戸遺跡の中世の遺構・遺物については、当調査地区的西北西側約350mの地点まで、遺構・遺物を確認している。

今回の調査における中世の遺構としては、土坑・溝である。また調査地区的東側約3分の1は凹地S X47と称している所で、この部分について中世の段階で整地作業が行なわれたと推定した。また中世の遺構とのかかわりでは、地震址が中世の土坑で切られており、南北朝～室町時代以前に相当規模の地震があったことを示している。

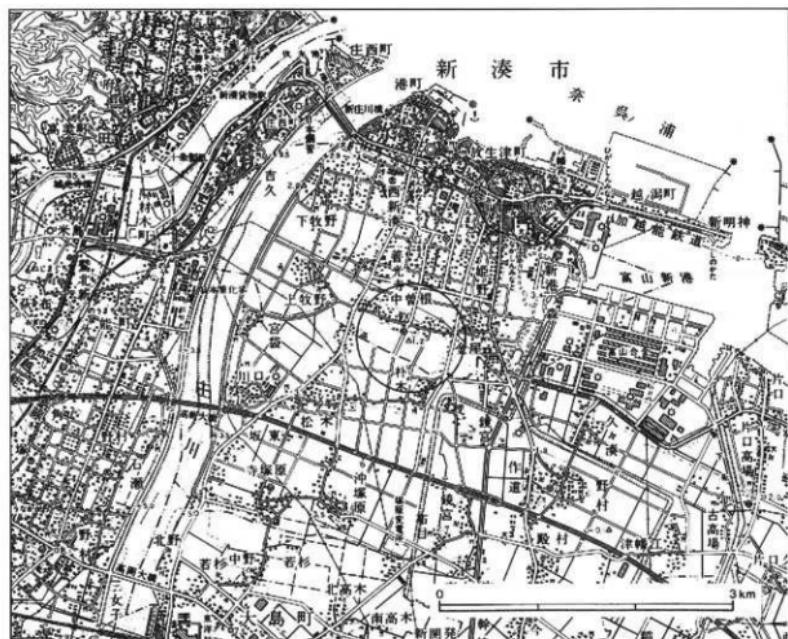
参考文献

- 田辺昭三 1966 「陶邑古窯址群」 I 平安学園考古学クラブ
田島明人 1986 「考察—漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡』 I 右川県蔵文化財センター
伊藤隆三 1987 『富山県小矢部市道林寺遺跡』 小矢部市教育委員会
吉岡康暢 1991 『日本海域の土器・陶磁器「古代編」』 六興出版
宮出進一 1995 「各地の土器様相—北陸」『概説中世の土器・陶磁器』(中世土器研究会編) 真陽社

3. 中曾根遺跡、得能地区

中曾根遺跡得能地区、目次

I 序 説	27	III 遺 物	31
II 遺 構	29	IV 結 語	32
1. 土坑	29		
2. 游	30		



第9図 中曾根遺跡位置図 (1 / 5万)

I 序 説

遺跡概観

当「中曾根遺跡」は、富山湾へと注ぐ庄川右岸の射水平野に立地する。高岡市街地から北東約5kmに位置する。遺跡の北側は新湊市街地であり、東側にはかつての放生津潟を造成した富山新港がある。この放生津潟や周辺の湿地地帯に囲まれた標高約1～2mの微高地に当遺跡がある。この付近は、神楽川、下条川、鍛治川などが下流に形成した沖積低地にあたる。周辺には縦文時代の上牧野新庄川遺跡がある。弥生時代～中世を主体として中曾根西遺跡、中曾根北遺跡、中曾根館遺跡などの遺跡群がある。また、中世放生津金屋の所在地とされる牧野金屋遺跡、宗良親王の伝承で知られる撲館塚遺跡があり、北東約1kmの新湊市放生津には、越中の守護所、守護代の拠点である放生津城が置かれた。南側約3kmには奈良・平安時代の人形、木簡や中世の铸造遺構が発見された大島町北高木遺跡がある。近代には上牧野村、中曾根村、姫野村、金屋村、石丸村、堀岡又新村の一部が合併して牧野村となり、更に高岡市との合併を経て現在に至る。遺跡の範囲は、南北400m×東西350mを計る。平成6年度に実施した分布調査の結果、新たに範囲を推定したものである。



第10図 中曾根遺跡調査地区位置図（1／5,000）

調査に至る経過

平成7年1月、市農業委員会からの照会で、当遺跡における農地転用と個人住宅の建築計画を知った。地主の得能雄吉氏との協議・承諾を得て、平成7年3月に試掘調査を実施した。この際、遺構が調査地区内で検出され、弥生土器などが出土した。試掘調査の結果を受けて、この後の協議により、平成7年度に本調査を実施することとなった。調査地区は、中宮根集落の中央部、市立牧野公民館の南東側、遺跡の中央東側に位置する。今回の本調査は、牧野地区における最初のものとなる。

調査経過

発掘調査は、平成7年11月6日から同年12月21日まで実施した。実働調査日数は14日である。表土の除去はバックフォーで行い、場内に積み上げた。その後、遺構の確認や掘り下げ、記録の作成を行った。調査地区内は水が断えず湧きだし、排水にかなりの時間と手間を費やした。地山が砂質土の箇所は、湧水により遺構の側壁が崩れやすく、遺構同士の切り合いや土層の確認、遺構の完掘が困難であった。また、本格的な作業を12月に入つてから実施せざるを得なかつたので、天候面での条件もよくなかった。遺構の実測は時期的に作業日数に制約があったため、テント等を随時使用し、作業の進展を計つた。

調査対称面積は660m²で、302m²の発掘を実施した。

基本層序

基本層序は、厚さ20~30cmの耕作土の下に、直接、青灰色粘質土、淡緑色砂質土の地山が表れる。この間に、遺物包含層は認められない。出土遺物のほとんどは遺構埋土内からの出土である。

また、戦後に行われた区画整理等により、周辺の地形はかなり変更されており、調査地区も地山面まで削平を受けていると思われる。

検出遺構

検出遺構は次のとおりである。

上坑11基 (SK01~11)、溝3条 (SD01~03)

この他にピットが1箇所検出された。また、区画整理以前に使用されていた旧用水跡が、現水田区画と平行して検出された。近世陶器類、泥人形(伏見人形)が出土している。調査地区的北西側に遺構は集中しており、南東側には少なく比較的浅いものが多い。

出土遺物

出土遺物は以下のとおりである。

土器・陶磁器類；弥生土器、須恵器、株洲、越中瀬戸、近世陶器。

土製品；土製紡錘車。

出土遺物のほとんどが土器・陶磁器である。中でも弥生土器が最も多い。

グリッド

調査地区的グリッドは平面直角座標系の第7座標系(原点は北緯36°00'00"・東経137°10'00")に合わせた。メッシュの表示は一辺5m四方を一つの区画とし、南北をX軸、東西をY軸とした。左斜め下の数値がそのグリッドを表すものである。X=1、Y=1の地点は、原点より、西へ7.76km、北へ84.66kmの位置である。

II 遺構

1. 土坑

土坑SK01

調査地区の北西側（2，3）区で検出された。平面形は楕円形で、規模は、長軸1.32m、短軸1.28m、深さ12cmである。出土遺物はない。

土坑SK02

調査地区の北西側（2，3・4）区で検出された。平面形は楕円形で、規模は、長軸2.82m、短軸1.40m、道標発掘の際、湧水のため完掘できず、深さは31cmを確認した。出土遺物は弥生土器、陶磁器である。

土坑SK03

調査地区的北西側（3，3）区で検出された。平面形は楕円形で、規模は、長軸2.18m、短軸2.21m、確認した深さは56cmである。南側でSD02を切っている。出土遺物は弥生土器、近世陶器である。

土坑SK04

調査地区的南東側（2・3，3）区で検出された。平面形は楕円形で、規模は、長軸1.43m、短軸0.86m、深さ24cmである。出土遺物は弥生土器片、珠洲である。

土坑SK05

調査地区的北西端部（2，4）区で検出された。平面形は不定楕円形で、規模は、長軸2.33m、短軸2.21m、深さ16cmである。SK10に切られている。出土遺物は弥生土器片である。

土坑SK06

調査地区的北西端部（2，4）区で検出された。平面形は楕円形で、規模は、長軸1.78m、短軸1.00m、深さ16cmである。SK05.10に切られている。出土遺物はない。

土坑SK07

調査地区的南東端部（6，1）区で検出された。東側は調査地区外となる。平面形は楕円形と想定されるが、一部のみを検出している。深さは16cmである。南側でSD03を切っている。出土遺物はない。

土坑SK08

調査地区的北西側（2，3）区で検出された。平面形は楕円形で、規模は、長軸1.18m、短軸1.06m、深さ38cmである。出土遺物は弥生土器片である。

土坑SK09

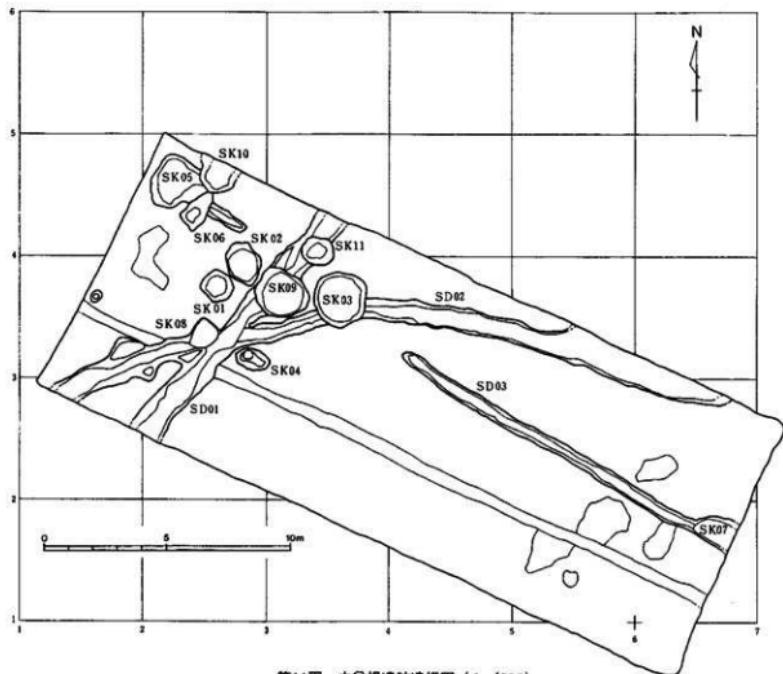
調査地区的北西側（2・3，3）区で検出された。平面形は楕円形で、規模は長軸2.16m、短軸1.92m、発掘中、湧水のため完掘できず、深さは47cmを確認した。出土遺物は近世陶器片である。

土坑SK10

調査地区的北西隅部（2，4）区で検出された。北側は調査地区外となる。平面形は楕円形と想定する。規模は、深さ20cmである。南西側をSK05に切られている。出土遺物はない。

土坑SK11

調査地区的北西側（3，3・4）区で検出された。平面形は楕円形で、規模は、長軸1.34m、短軸1.22m、湧水のため完掘できず深さは30cmを確認した。出土遺物は弥生土器片である。



第11図 中曾根遺跡遺構図 (1/200)

2. 溝

溝SD01

調査地区的西側を南北に走る溝である。規模は、長さは11.3mに亘り検出し、幅82~128cm、深さ39cmである。北側、南側は調査地区外となる。中央部から北側でSK08.09.11に切られている。中央部でSD02を切っている。出土遺物は、弥生土器、紡錘車である。図示したものは、9008.9014.9015.9020である。

溝SD02

調査地区的南西隅部で検出された南西~北東へ走る溝である。北東に延びた後、東へ緩やかに折れ曲がる。規模は、長さは25.1mに亘り検出され、幅68~106cm、深さ34cmである。図示したものは、9001.9003~9007.9010~9013.9016~9019である。

溝SD03

調査地区的中央部で検出された東西に走る溝である。規模は、長さ15.0mに亘り検出され、幅46~63cm、深さ11cmである。東側は調査地区外となる。東端部の一部はSK07に切られている。出土遺物は弥生土器である。図示した弥生土器は、9002.9009である。

III 遺 物

弥生時代中期の土器

弥生時代中期の土器として、図面28に11点図示した。内訳は、壺4点、甕7点である。

壺口縁部 9001.9002。緩やかに外上方に外反する口縁部である。口端部に櫛描刻み日文が付く。調整は内外面に刷毛目がなされる。9002は口端部内面に櫛描斜行短線文が2条付く。

壺底部 9003.9004。壺の胴下部、底部片である。9003の内外面の調整は、上部が刷毛目、下部からはナデであり、分厚い底部をもつ。9004は全体の器形が不明であるが、壺の底部とした。内外面とも磨滅しており調整は不明である。

甕口縁部 9005～9008。9005～9007は口縁部が大きく外上方に開き、調整は内外面に刷毛目がなされる。9005は口端部外面に櫛描刻み日文が加えられる。9006は口端部で内上方にやや肥厚し、波状になるものである。9007は口端部内面に櫛描羽状列点文が付く。9008は口縁部がくの字に外反する。口端部外面に強く横ナデがなされ、外傾する面をなす。内外面の調整は横ナデである。外面には煤が付着している。

甕底部 9009～9011。甕の底部片である。外面には刷毛目がなされ、煤が付着している。9011は磨滅して調整が明確に分からぬが、本来、外面は刷毛目調整であると思われる。

弥生時代後期の土器

弥生時代後期の土器として、図面28に9点図示した。内訳は、壺3点、甕5点、器台1点である。

壺 9012。9012はくの字状の口縁部に、鉢型に近い体部をもつ小型の広口壺である。口縁部内外面には横ナデがなされ、体部内外面にはナデ、一部にヘラ削りがある。法量は、口径8.2cm、胴部最大径8.6cm、器高5.9cm、底径2.7cmである。

壺底部 9013.9014。壺の底部片である。9014は外面の調整はヘラ磨きで、底部はヘラ削り、ナデである。内面は刷毛目、一部に赤彩の跡がみられる。9013は外面に刷毛状具によるナデ、底部はナデである。内面にはヘラ削りがなされる。

甕口縁部A 9015.9016。甕の胴上部片である。9015は口端部外面に稜をもち、やや内上方に延びる。口縁部、頸部の内外面は横ナデがなされ、肩部外面は刷毛目、内面はヘラ削りである。9016は口端部が直上方に延びる。口縁部から頸部の内外面の調整は横ナデで、肩部の上部内外面ともに刷毛目がなされる。

甕口縁部B 9017.9018。受口状口縁をもつ甕の口縁部片である。近江系の甕に類似するものがある。ともに口縁部が直上方ないしやや内上方に延びる。口縁部下部に櫛描刺突文が付く。口縁部内外面に横ナデがなされ、外面には煤が付着している。

甕底部 9019。甕の底部片である。内外面の調整は刷毛目である。

器台 9020。外上方に開き、外面に稜が付く口縁部片である。口縁部外面には磨き、凹線文が付き、内面には磨きが加えられる。内外面ともに赤彩されている。山陰系の器台と思われる。

IV 結 語

弥生時代中期の遺構と遺物

弥生時代中期の遺構としたものは、溝1条（S D03）である。南東側は調査地区外に延びるため全体が確認できない。確認した深さは5~10cmと極めて浅く、後世の削平を受けていると思われる。遺構内から、弥生時代中期の土器片がまとめて出土しているため、この時期と考える。また、調査地区中央部で一旦切られているが、北西側で遺構埋土を同じくする遺構があり、さらに北西方向へ延びていた可能性も想定している。

弥生時代後期の遺構と遺物

弥生時代後期の遺構は、上坑2基（SK08・11）、溝2条（SD01・02）である。SK08・11はSD01・02を切っているが、出土遺物に違いはなくほぼ同時期と考える。さらに、SD01をSD02が切っているが、それぞれの溝底部より弥生時代後期の土器が出土し、これらも時期を大きく前後するとは思われない。また、弥生中期としたSD03を、これらの遺構が切っている可能性も考えられる。

また、出土した土器の中に、外来系の土器として、受口状口縁を持つ近江系の壺類、山陰系の器台が見られる。出土遺物のほとんどは從来の月影式～白江式の時期に含まれる土器群と思われる。

この時期には気候が寒冷化し、海面が低下したため、放生津潟を含む当遺跡周辺は低湿地であったと想定されている。この自然環境が、牧野金屋、鏡宮北、荒畠・北高木、小林遺跡などの遺跡数の増加に反映されていると考えられている。今回の調査で主体となる時期もこの時期であり、背景としての関連が想定される。

中世の遺構と遺物

中世の遺構としたものはSK04である。珠洲の壺片が出土した。他の遺物は、表土や他の遺構内に散発的に出土している。関連する遺構や、他の遺構内でこの時期と思われる遺構は検出できなかった。

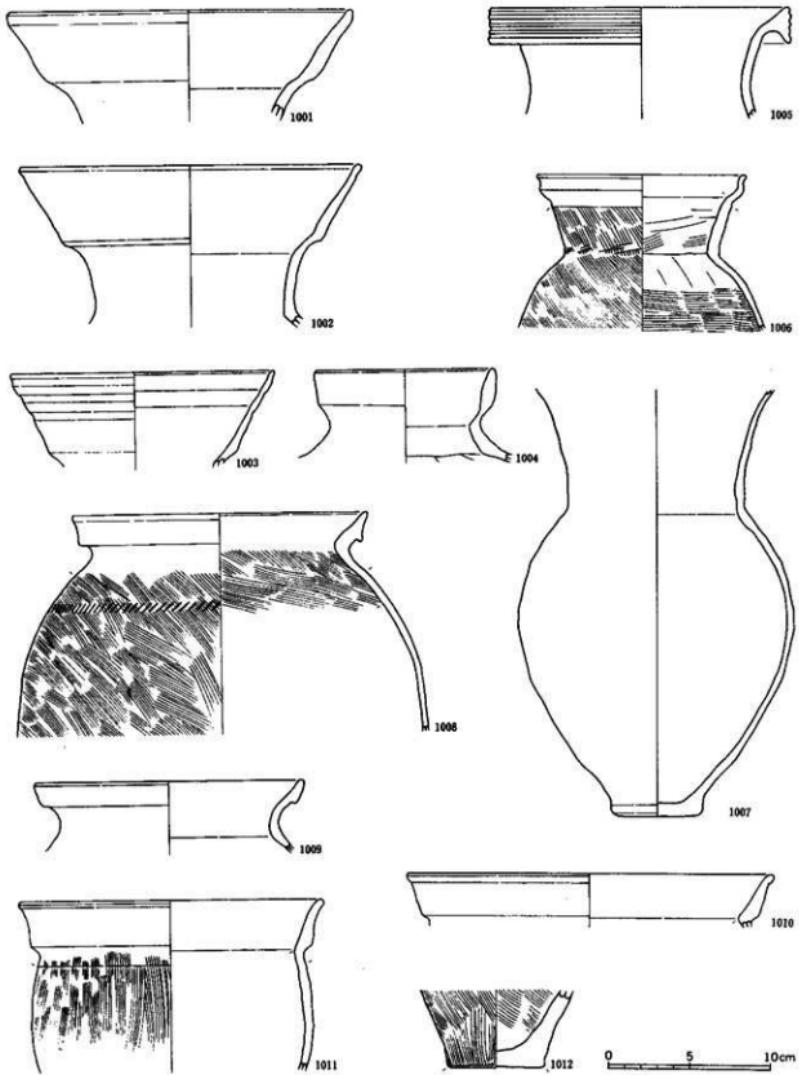
当遺跡近傍には、神楽川沿いに牧野金屋遺跡、荒畠・北高木遺跡などが立地している。中でも新湊市放牛津城跡は守護所、守護代館が置かれ、越中における政治の中心地であった。また経済的な面でも、神楽川流域で鉄物や製鉄、水運等の活動が盛んになったと想定されている。今回の調査では、この時期の遺構、遺物は主体として確認できなかった。

近世以降の遺構と遺物

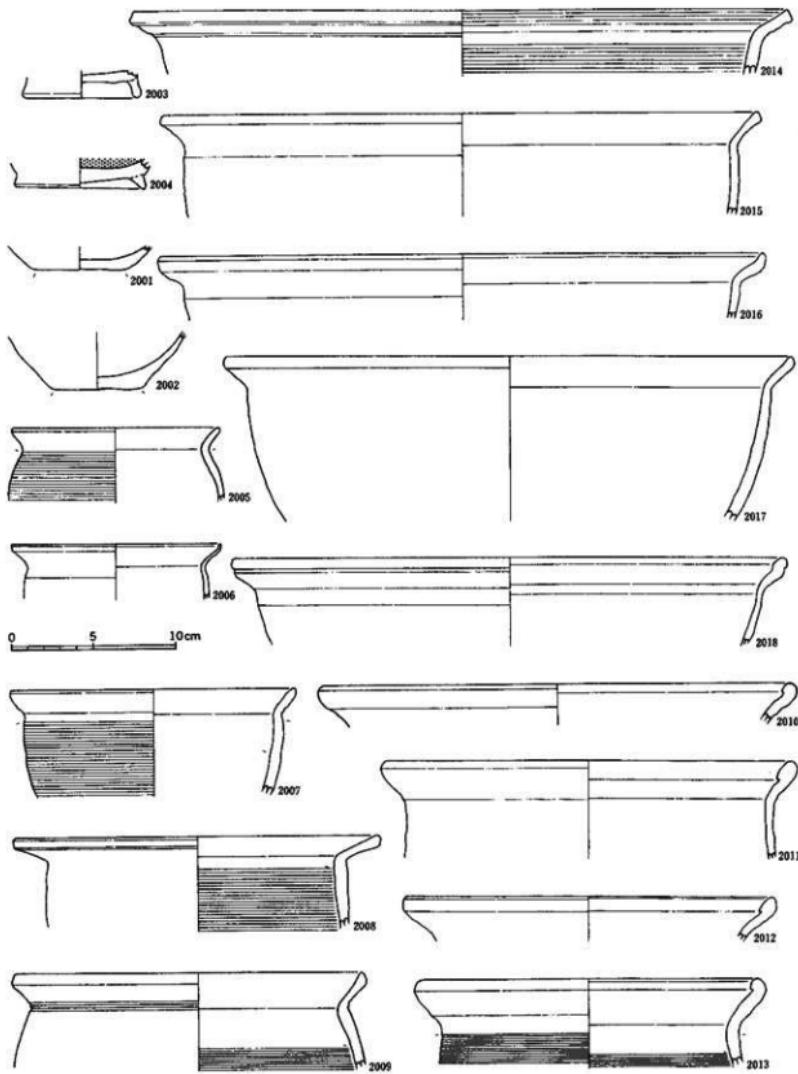
近世以降の遺構としたものは、土坑8基（SK01~03・05~07・09・10）である。SK02・03・09からは、近世陶器が出土している。また、SK01・05・06・10は、出土遺物がなく時期は断定できないが、平面形が略円形、不定輪円形を呈し、掘り方が浅いことや、遺構埋土が共通するためこの時期と考える。

図面・図版

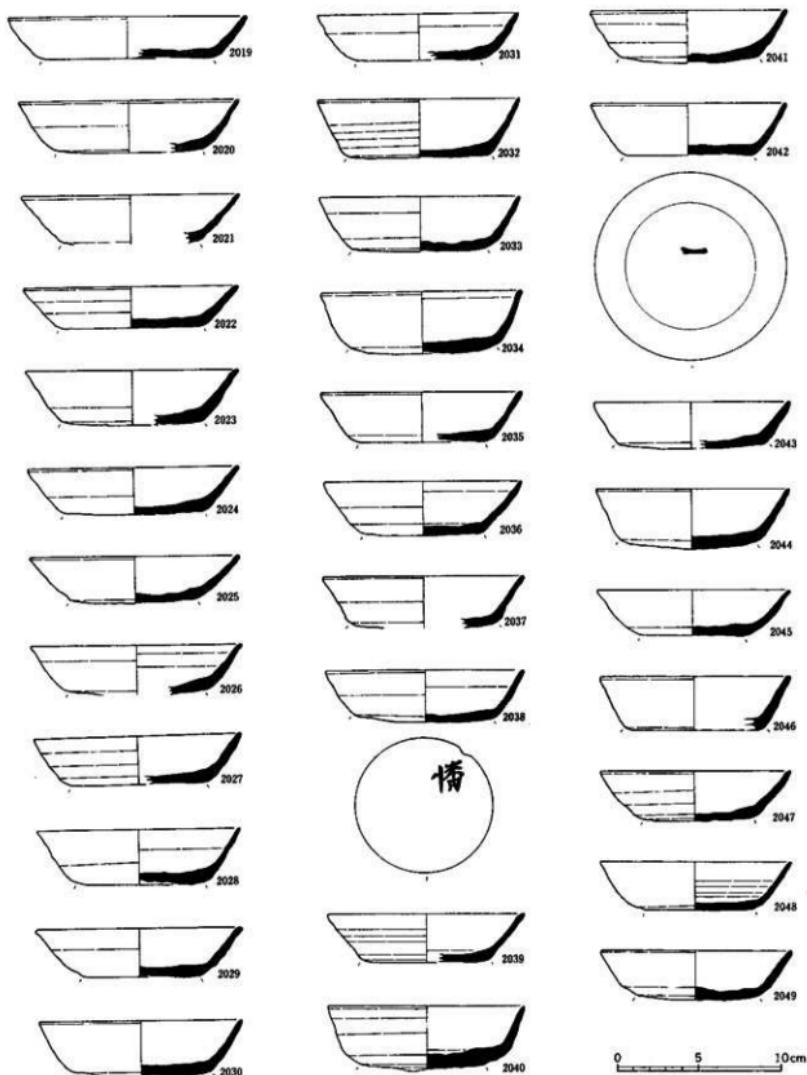
圖面一 遺物実測図
石塚長光寺遺跡



図二
遺物実測図 石堤長光寺遺跡



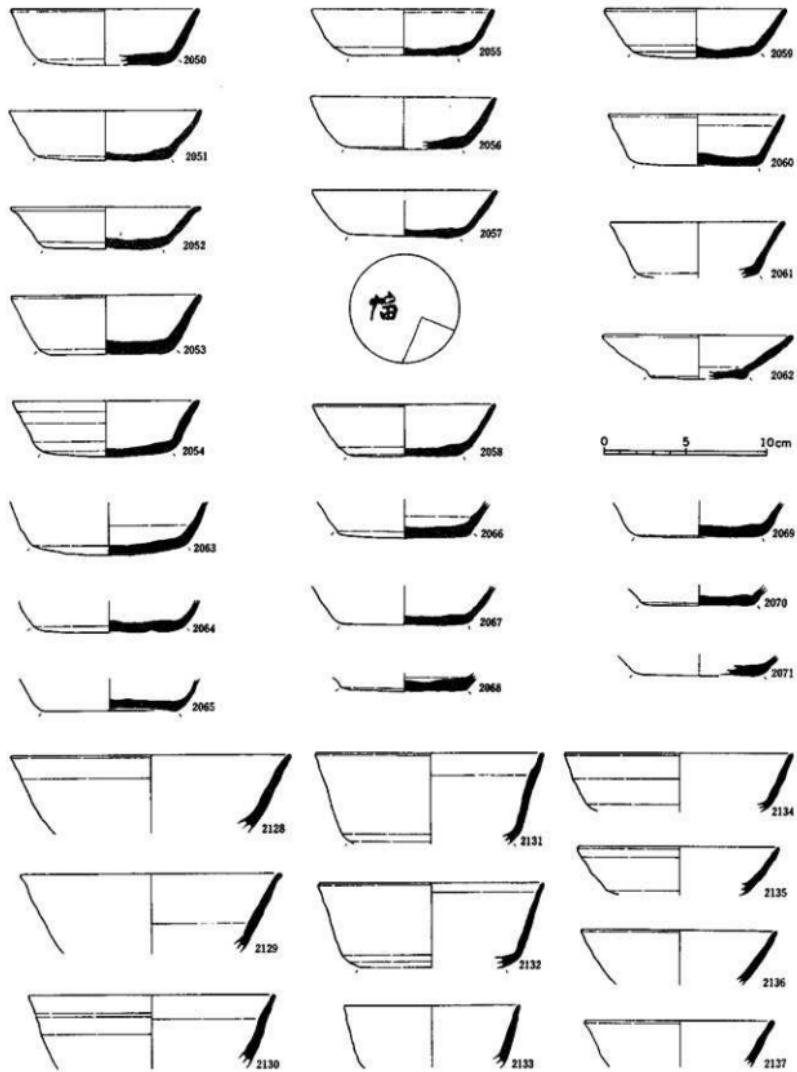
図面三 遺物実測図
石堀長光寺遺跡

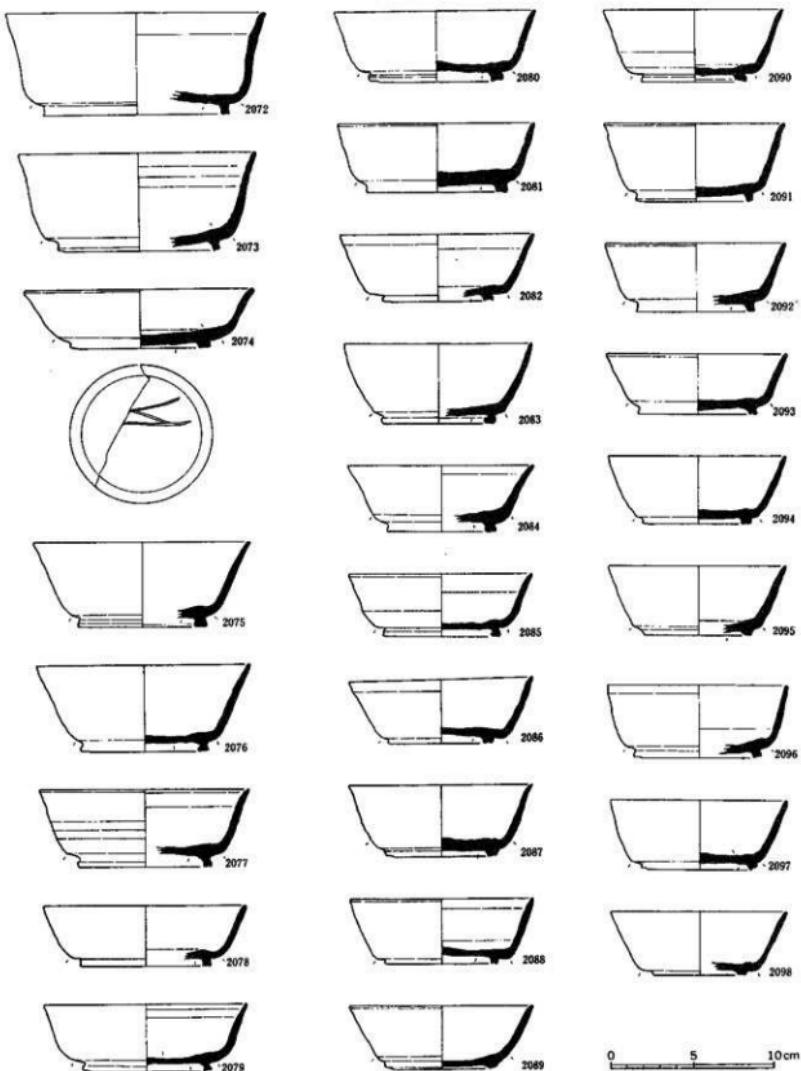


図面四

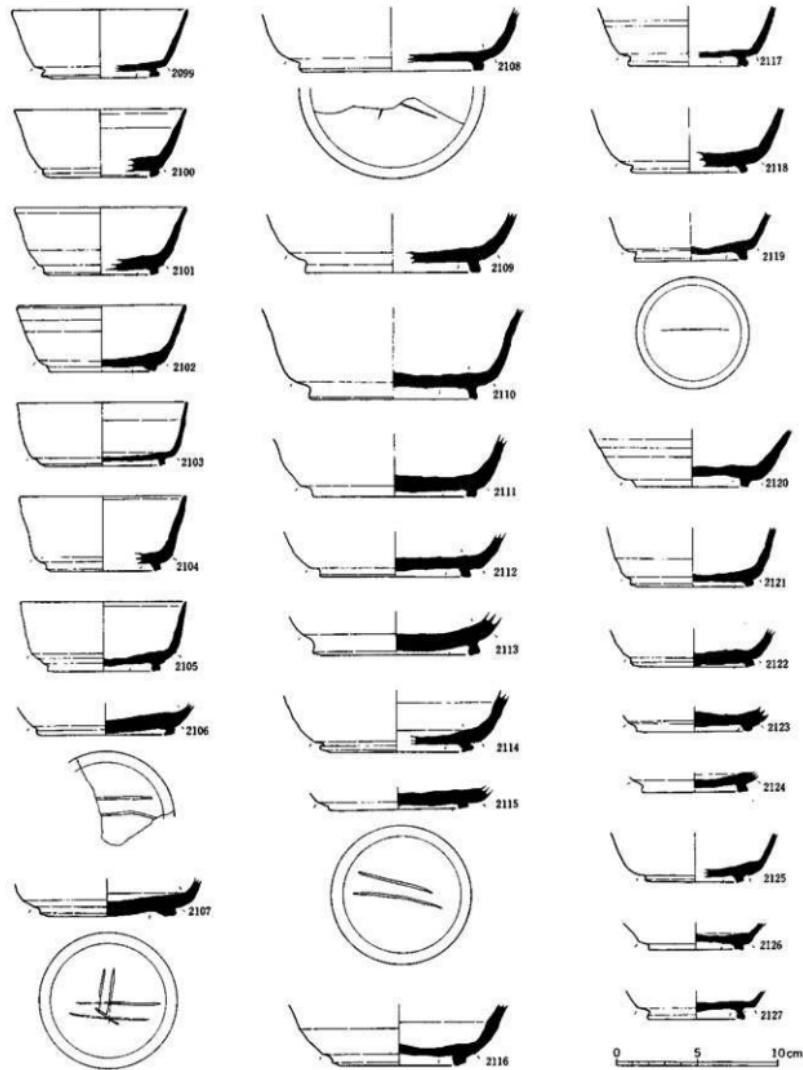
遺物実測図

石堤長光寺遺跡

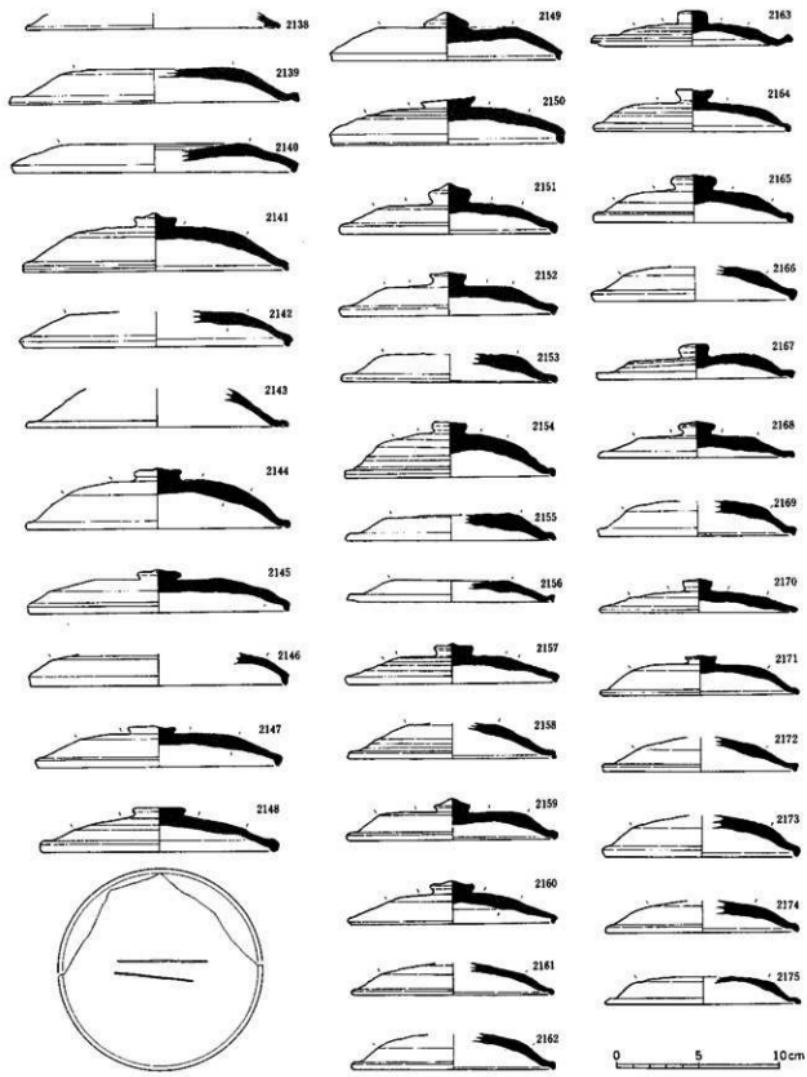




図面六 遺物実測図 石堀長光寺遺跡



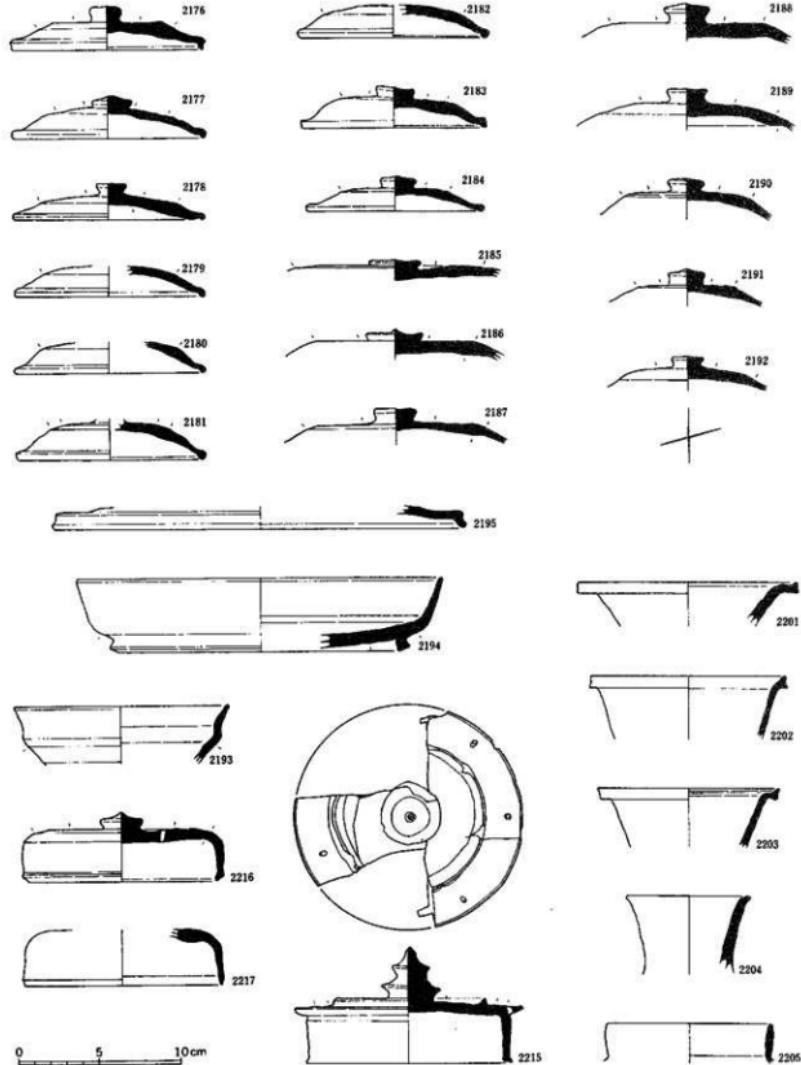
圖面七 遺物実測図 石堤長光寺遺跡

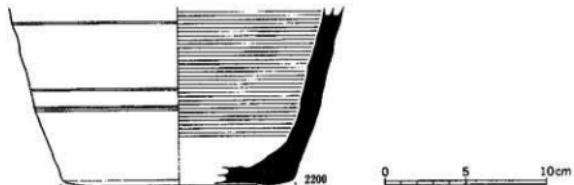
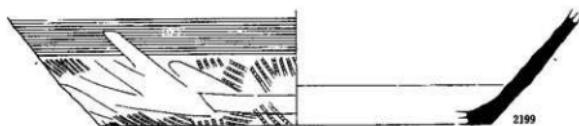
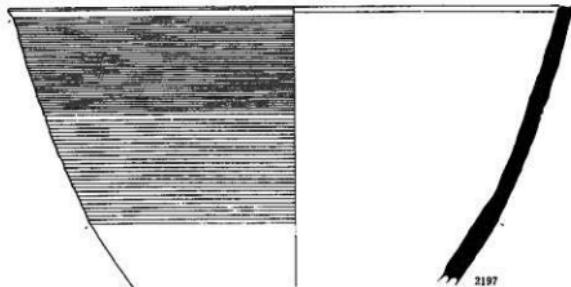


図面八

遺物実測図

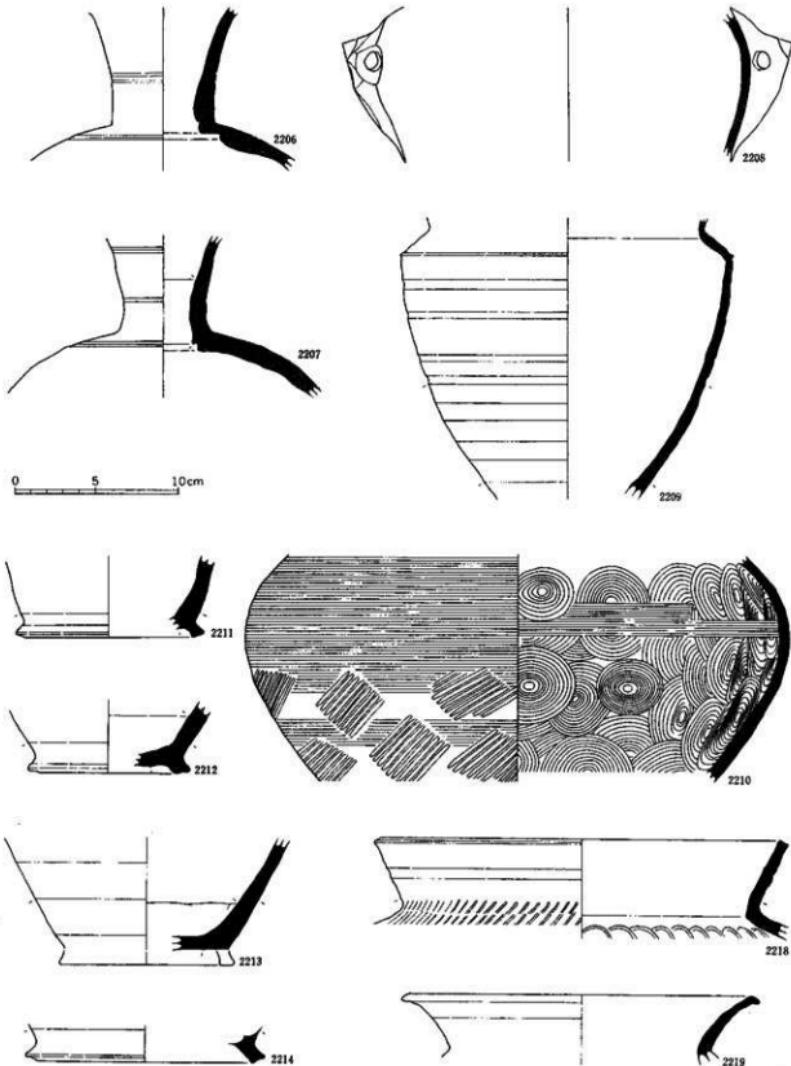
石堤長光寺遺跡



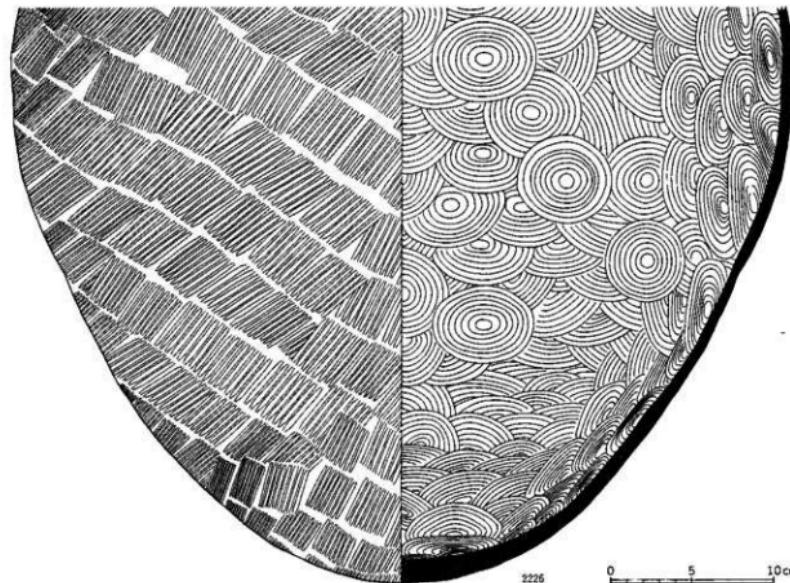
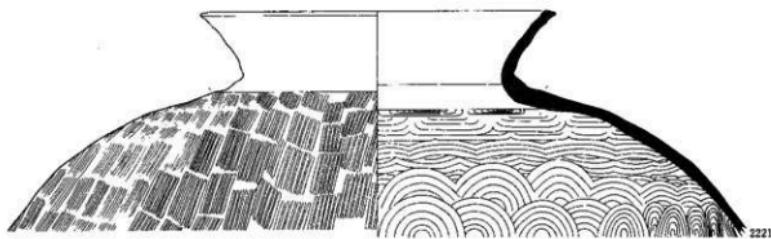


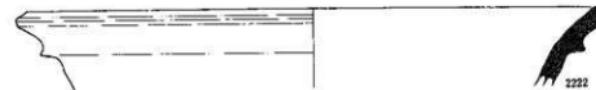
図面一〇 遺物実測図

石堤長光寺遺跡



図面一　遺物火燐図
石塚長光寺遺跡





2222



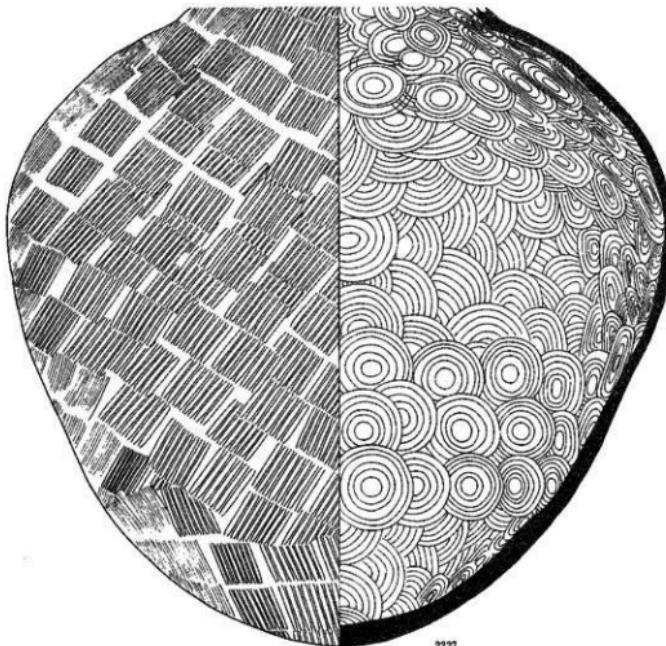
2223



2224



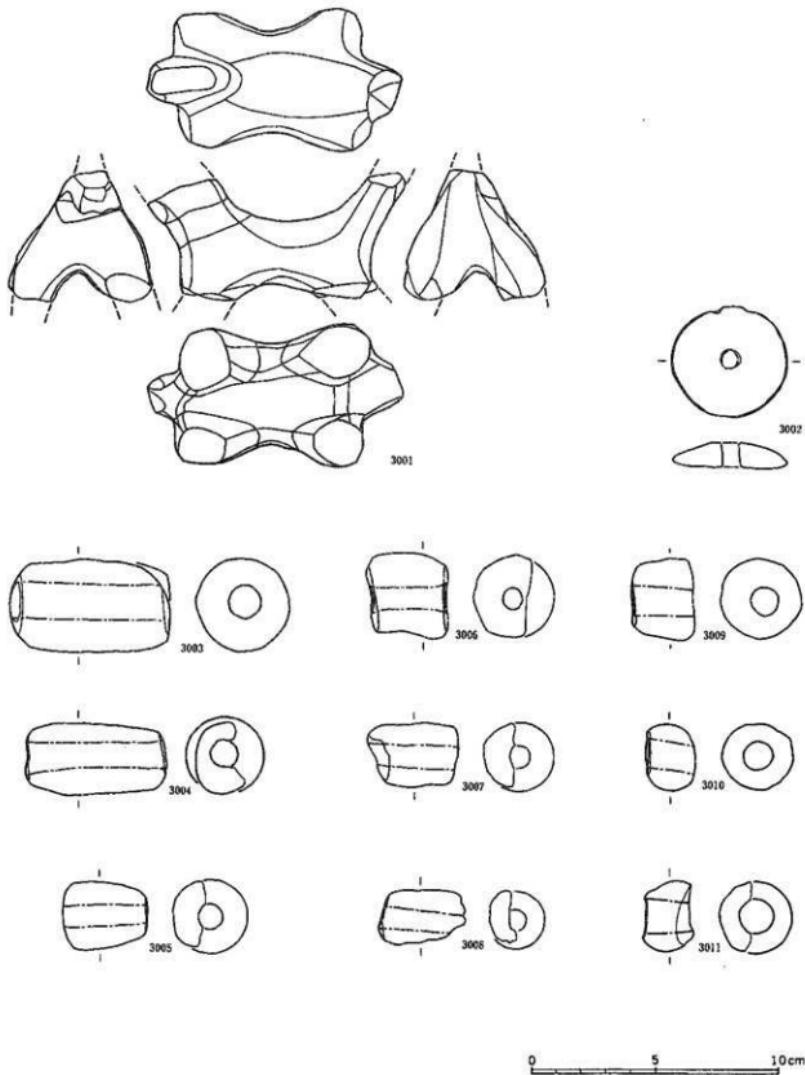
2225



2227

0 5 10cm

図面一三 遺物実測図 石塔良光寺遺跡

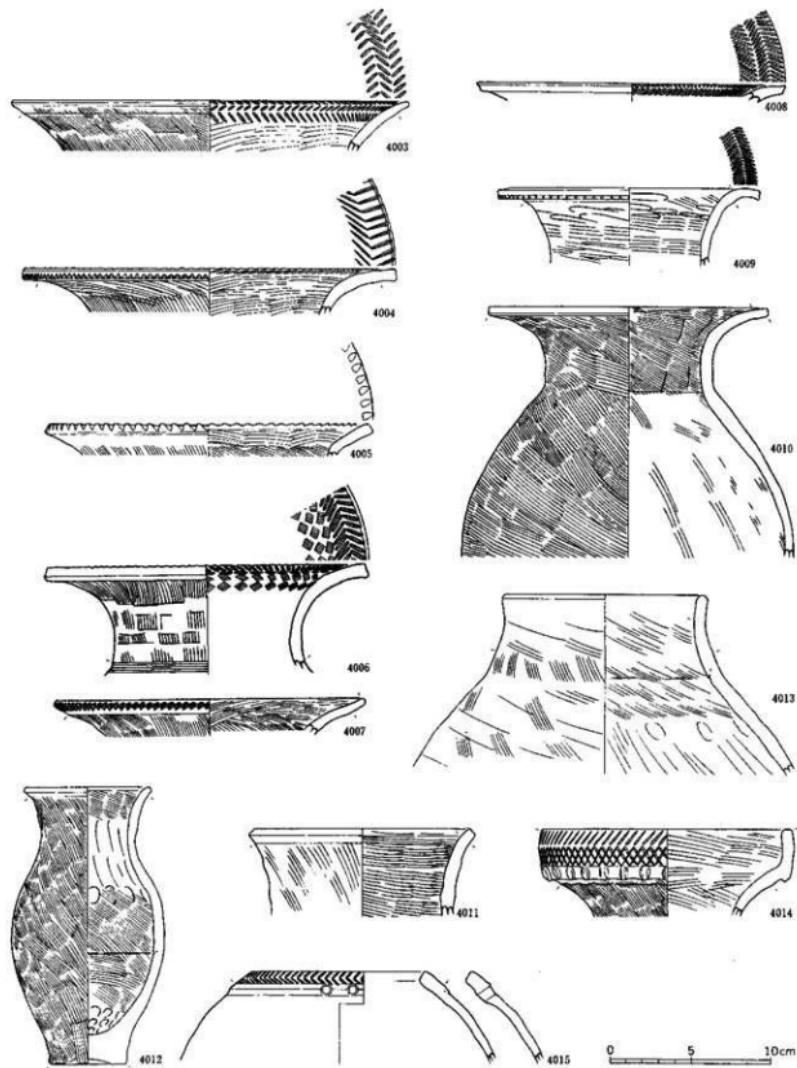


土製品

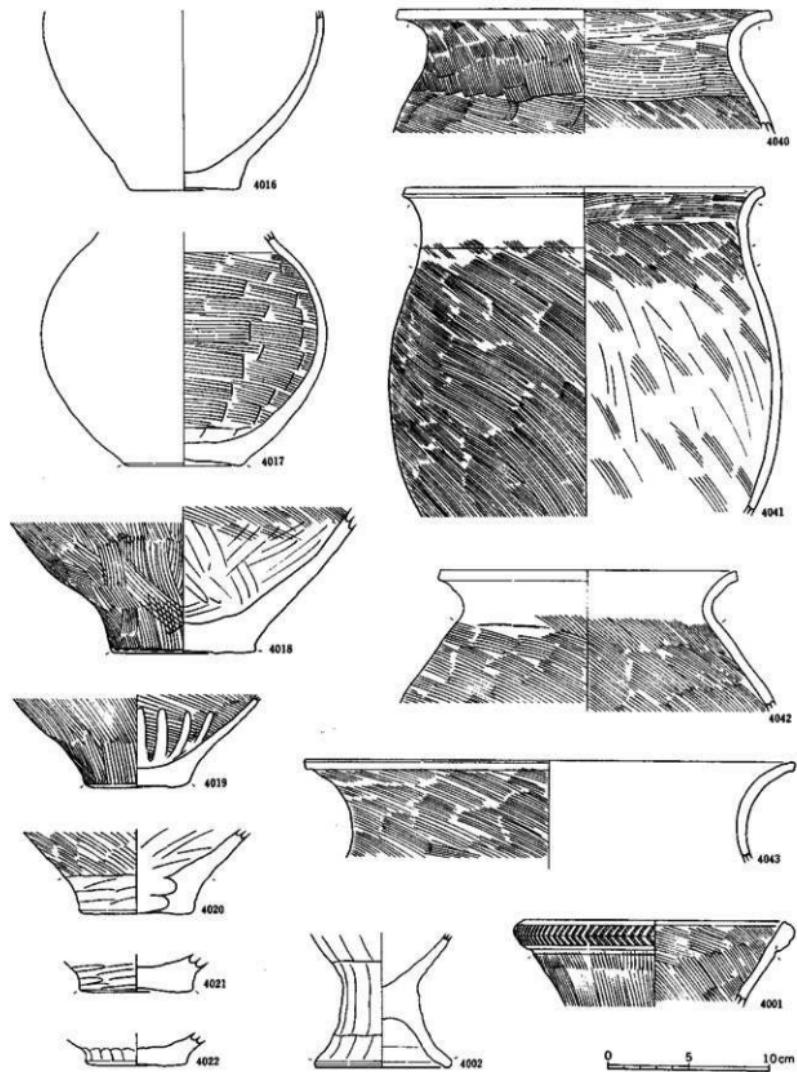
土馬：3001、土製紡錘車；3002、土鉢；3003～3011

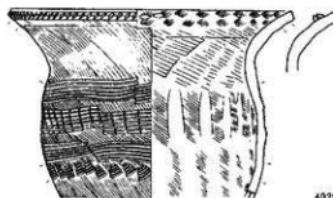
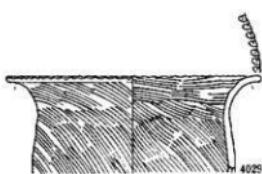
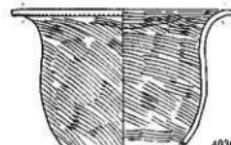
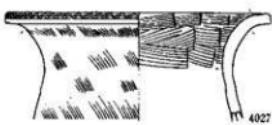
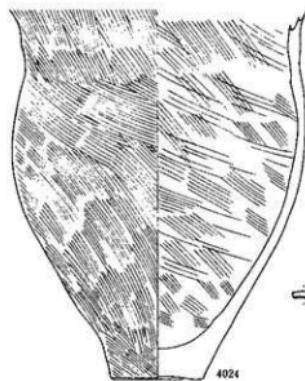
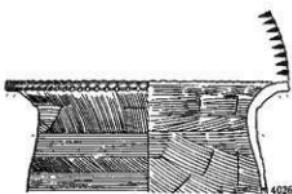
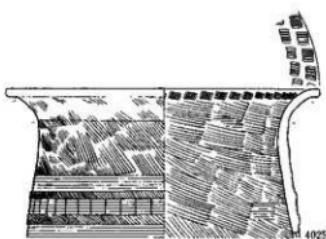
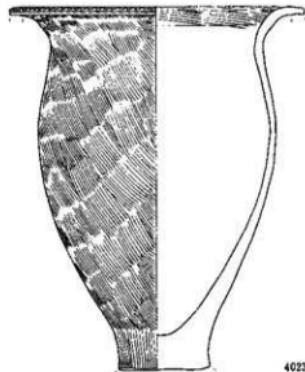
縮尺 1／2

0 5 10cm



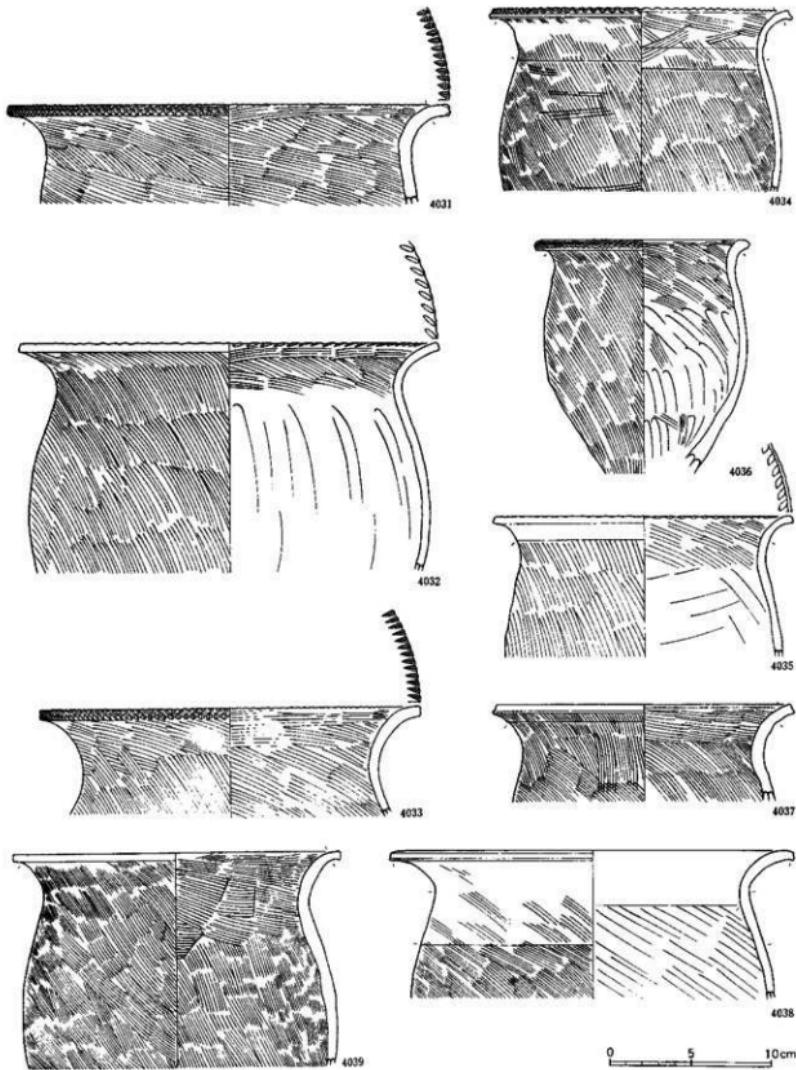
図面一五 遺物実測図
石塚遺跡



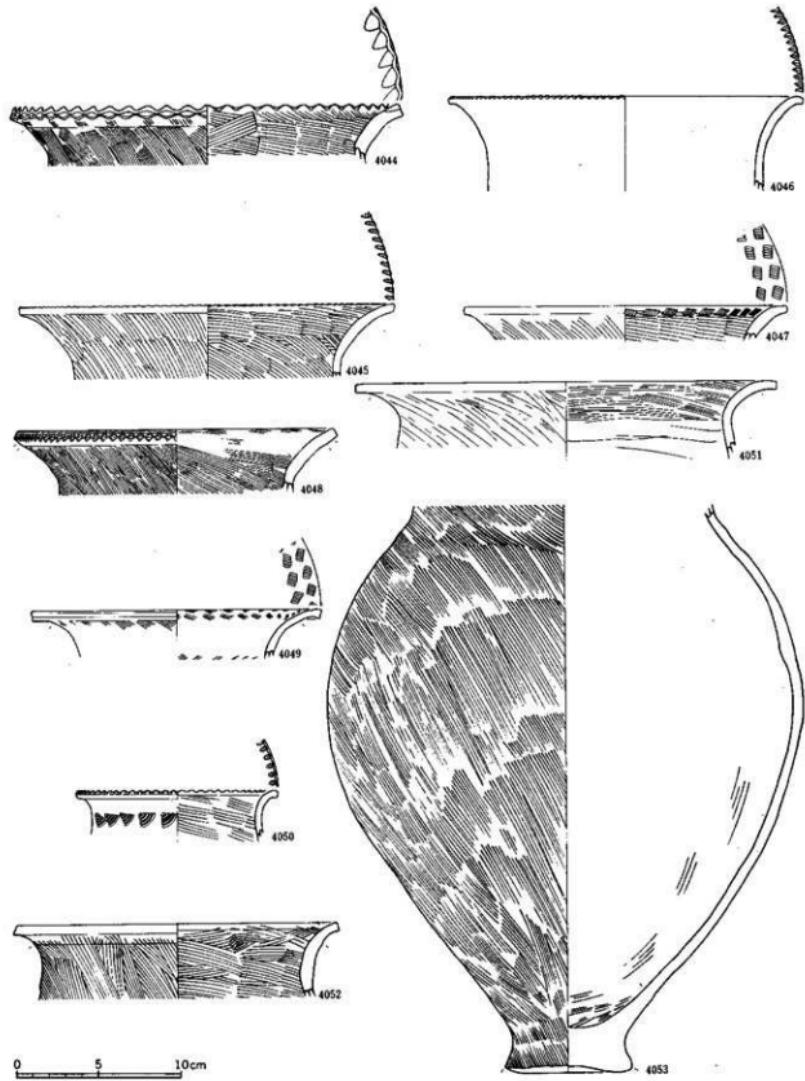


0 5 10cm

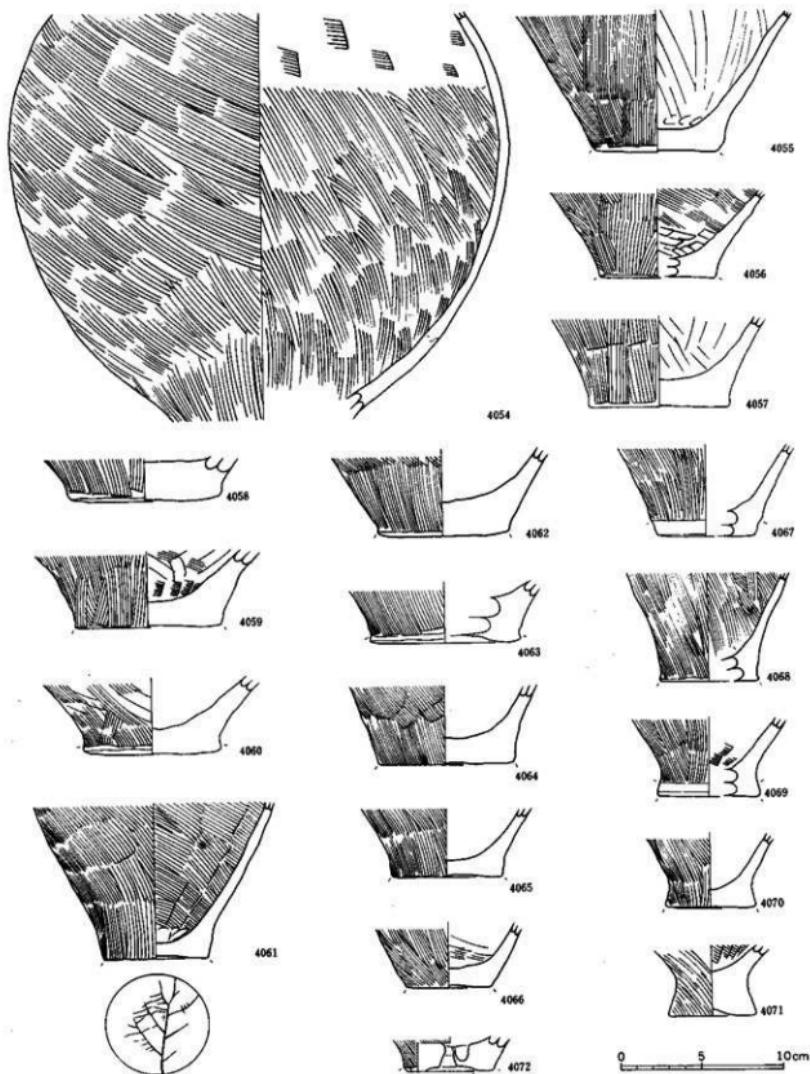
圖面一七 遺物実測図
石塚遺跡

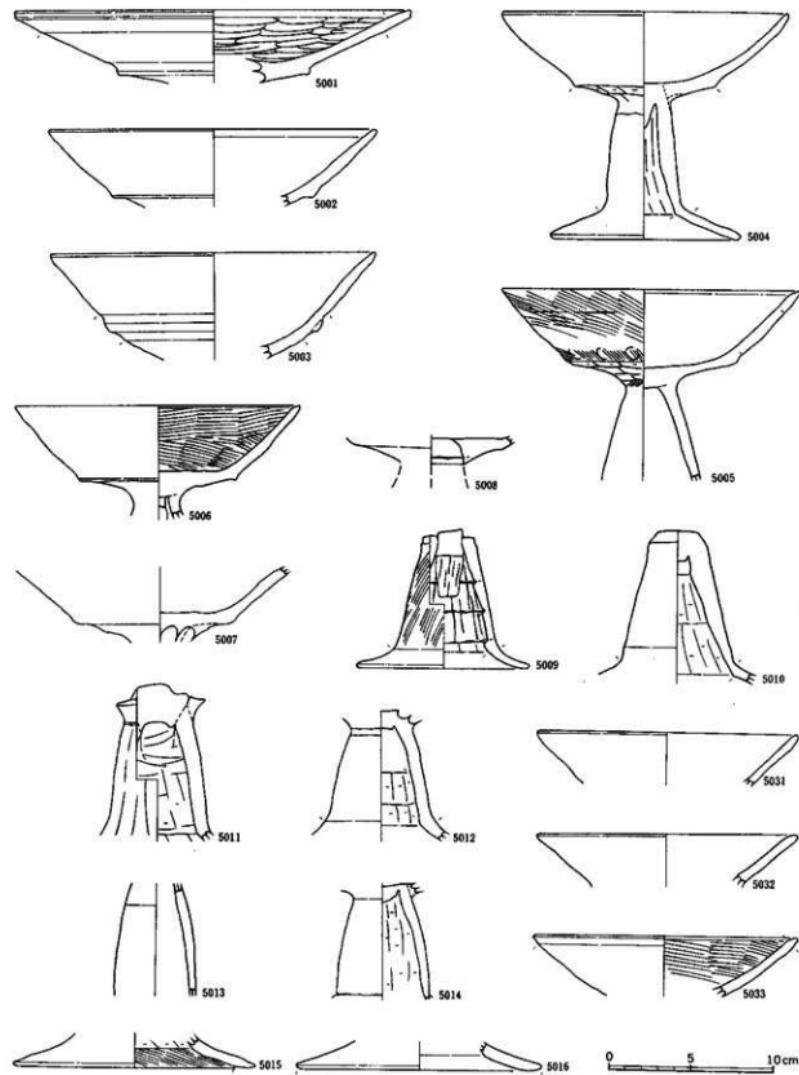


図面一八
遺物実測図
石塚遺跡

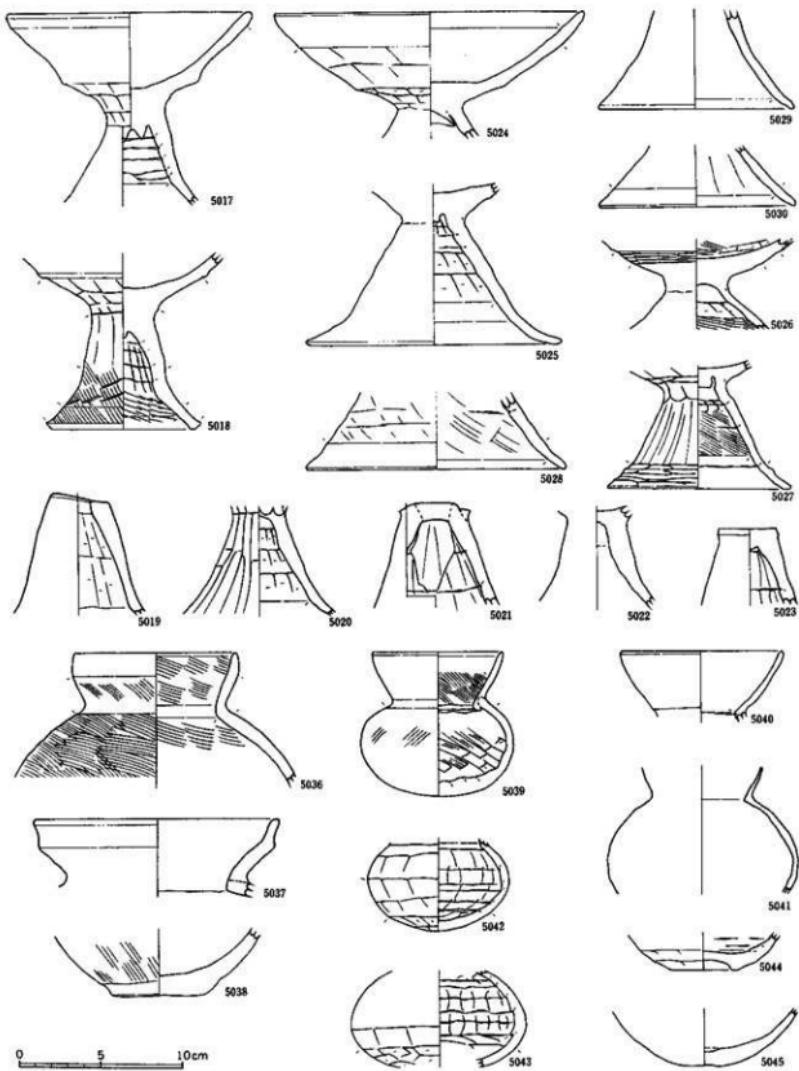


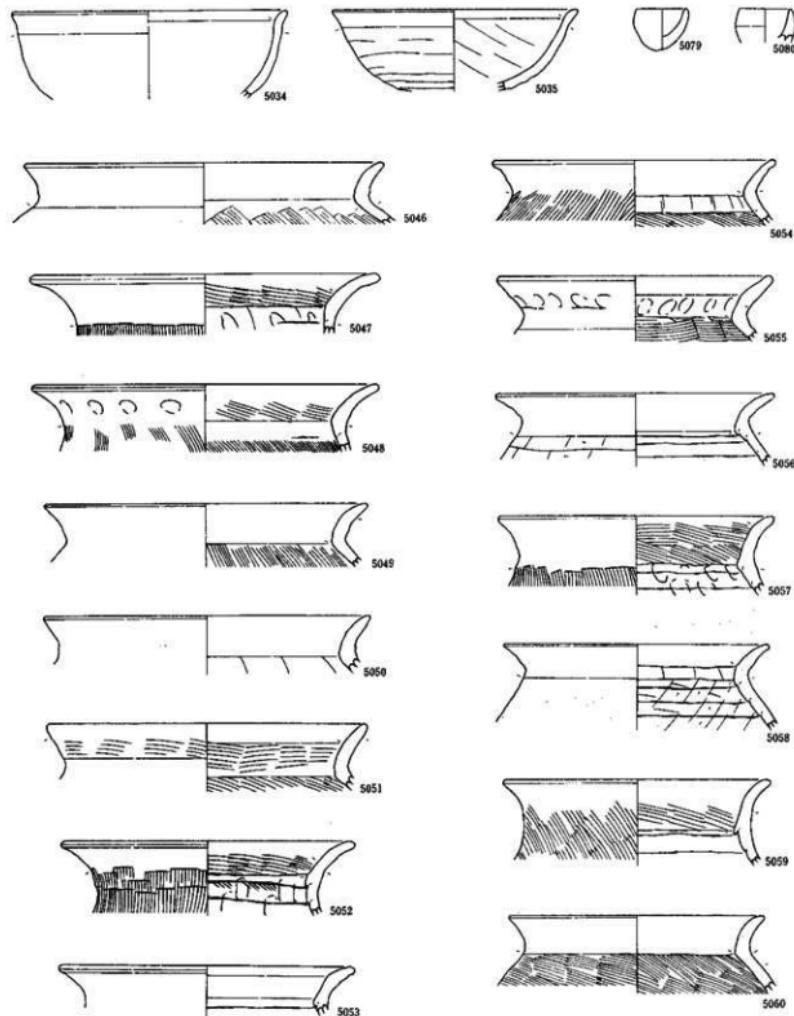
圖面一九 遺物集測図
石塚遺跡





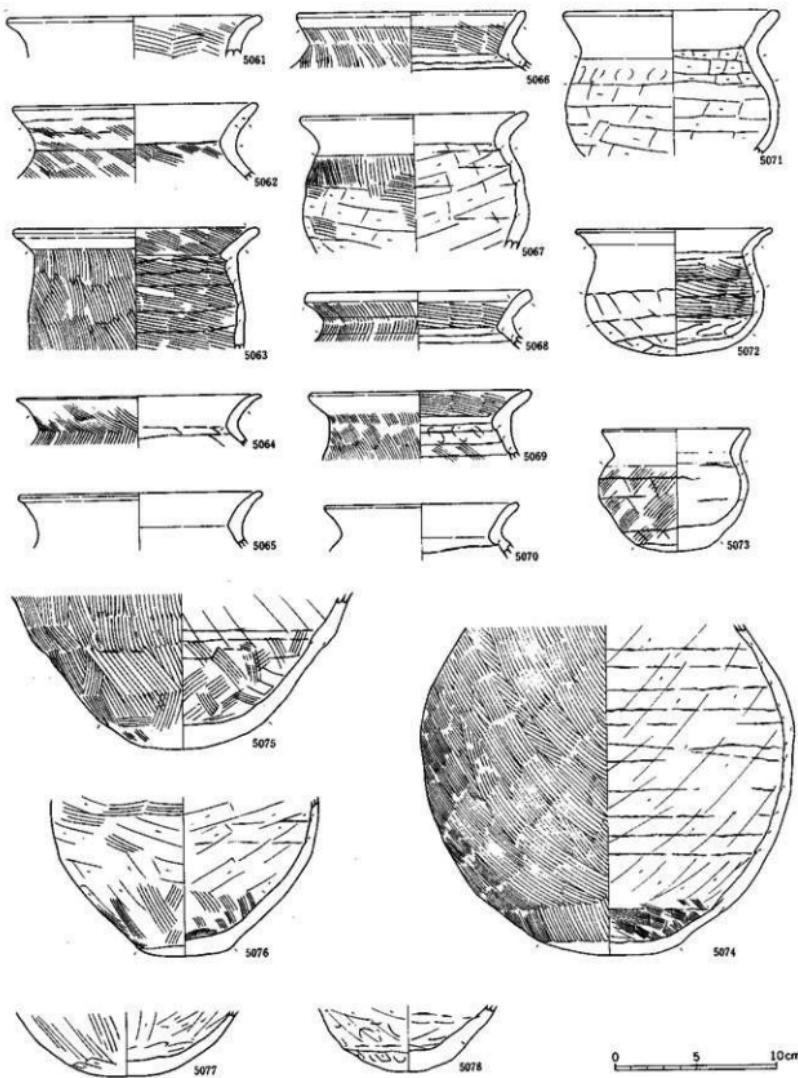
図二一 遺物実測図
石塚遺跡



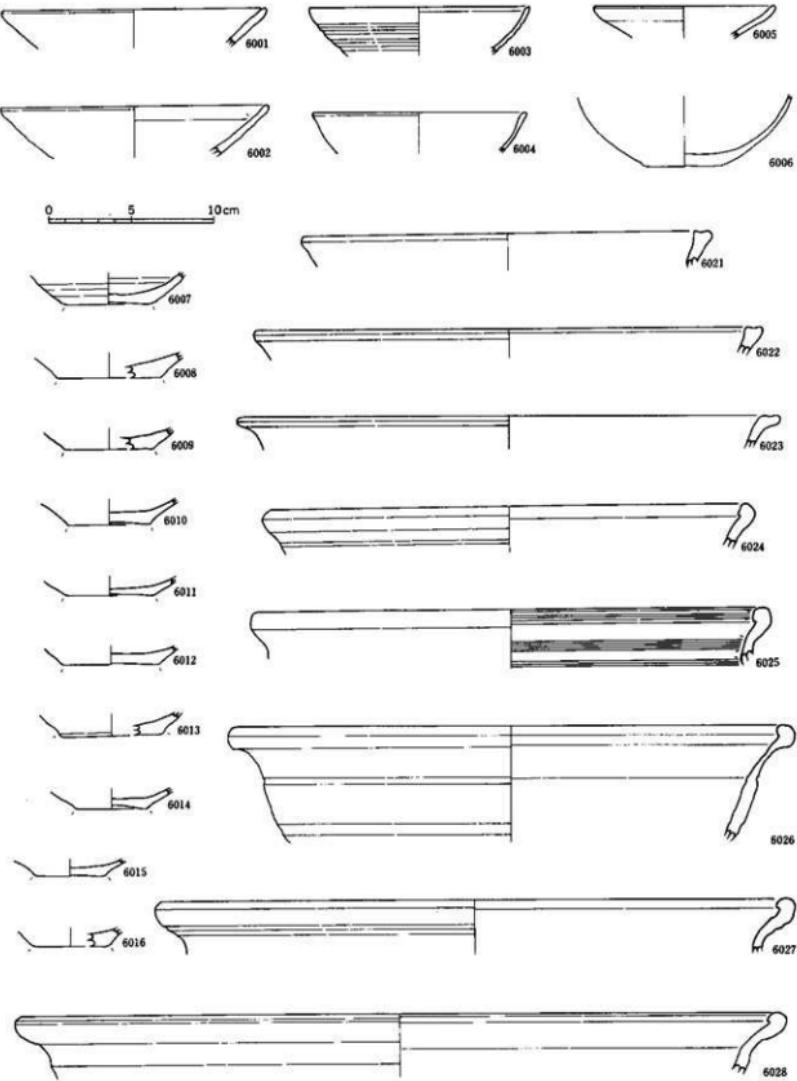


0 5 10 cm

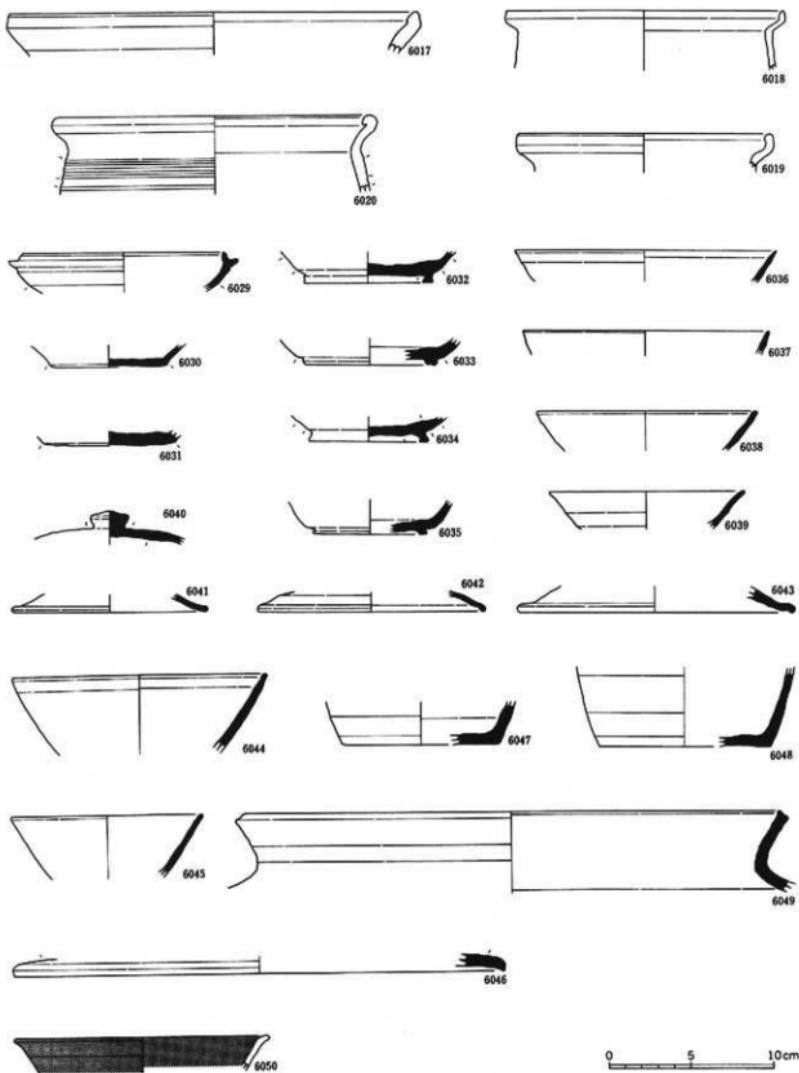
図面二三　遺物実測図
石塚遺跡

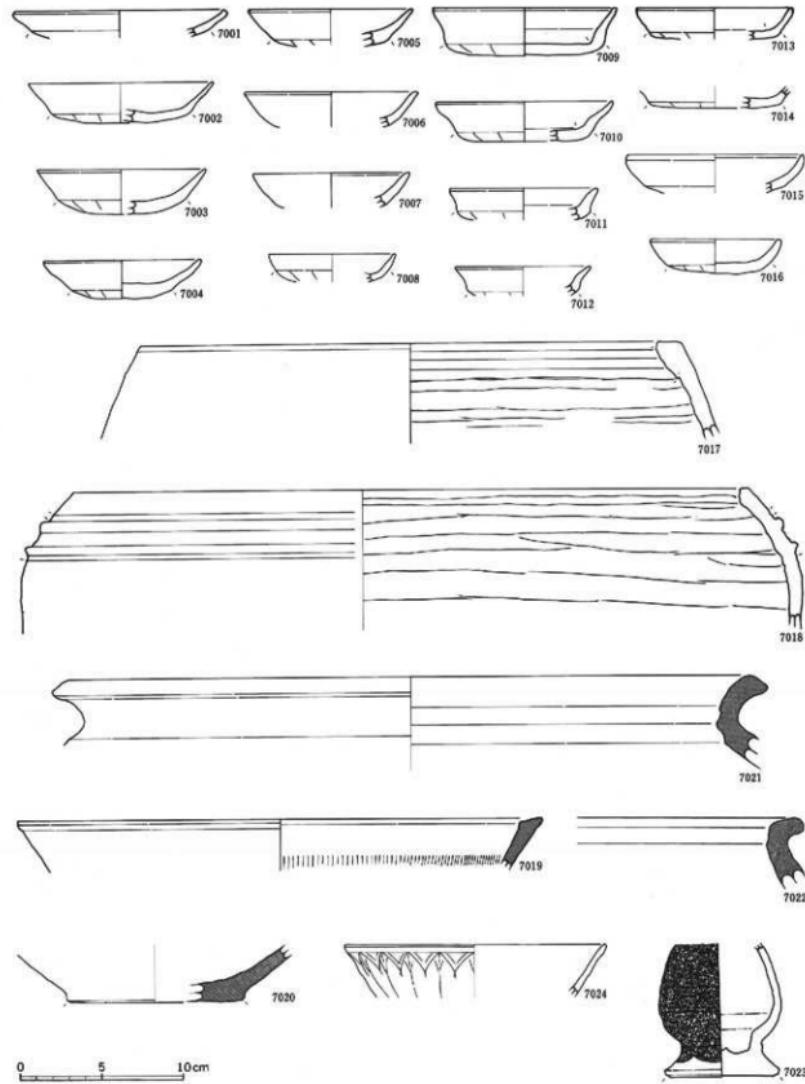


図面二四 遺物実測図 石塚遺跡

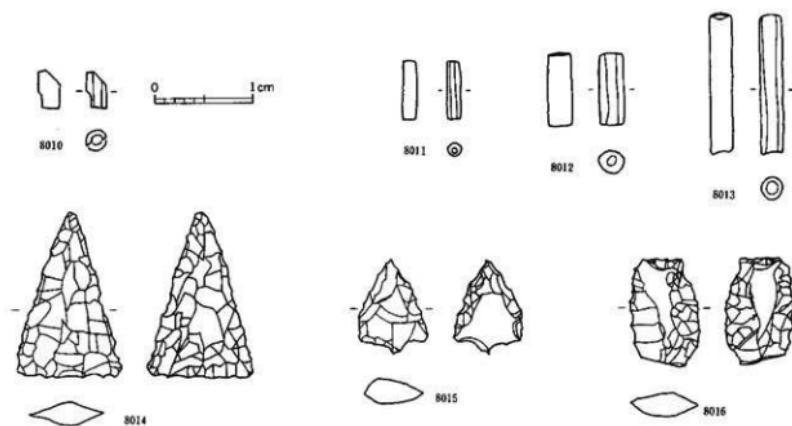
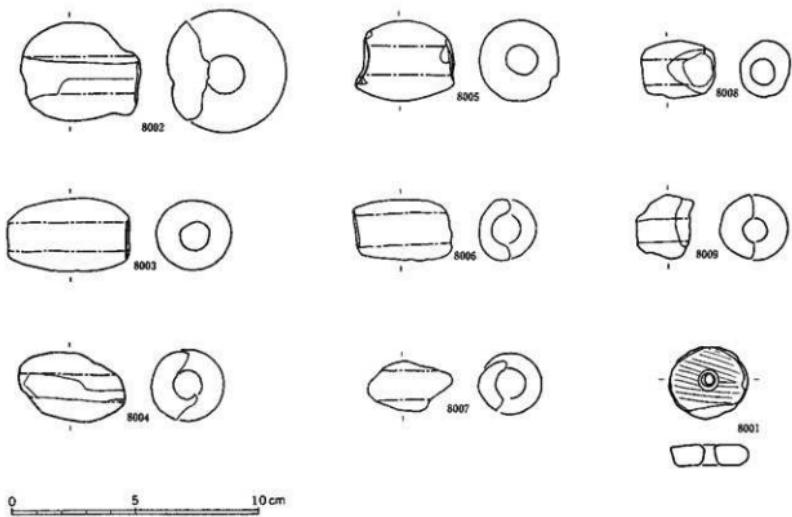


図面二五
遺物実測図
石塚遺跡





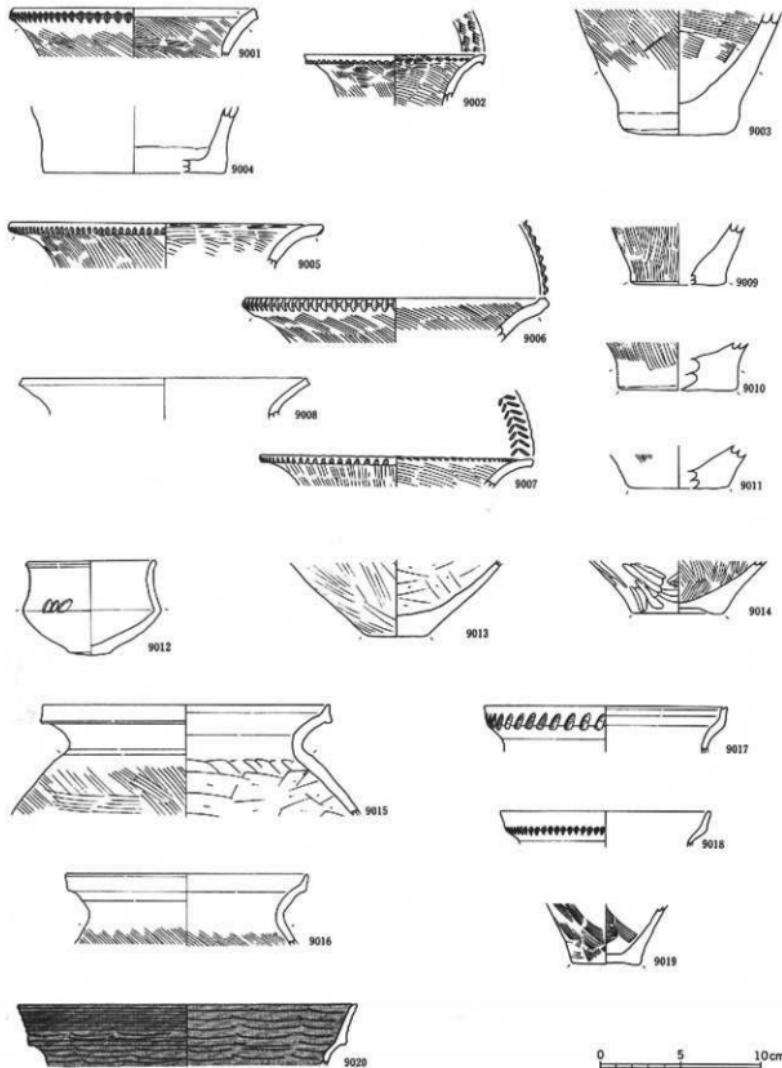
圖二七 遺物実測図
石塚遺跡



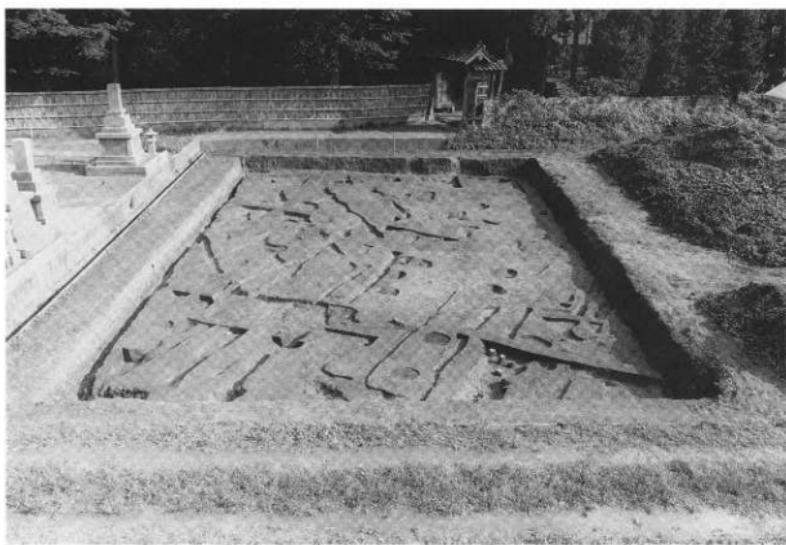
土製品、石製品
土製紡錘車；8001、土錐；8002～8009、管王；8010～8013、石錐；8014～8016

縮尺 1/2
実大、2倍

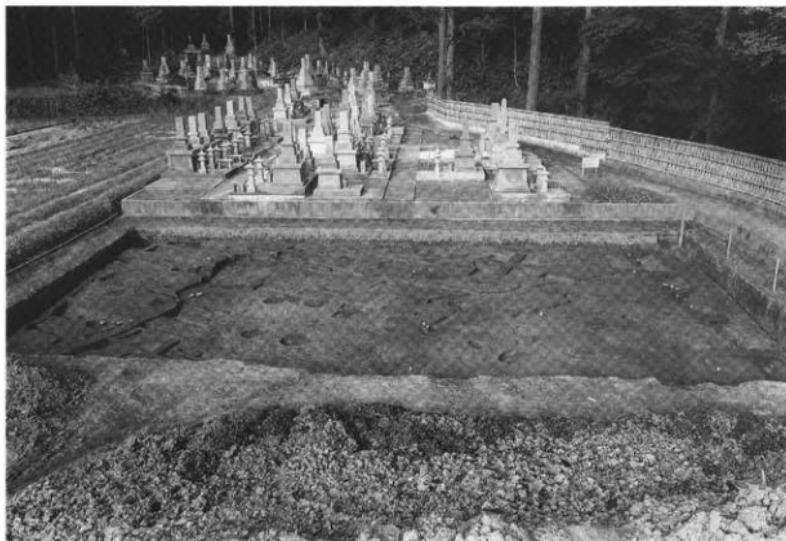
圖二八 遺物実測図
中曾根遺跡



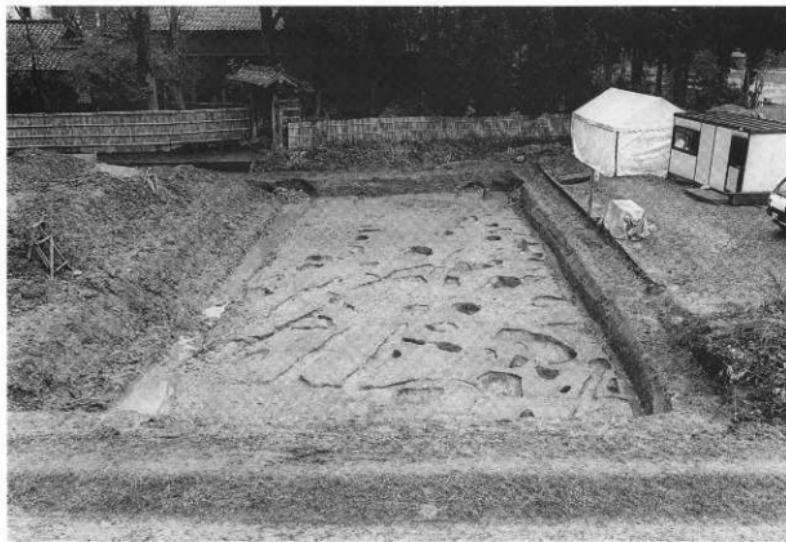
圖版一 遺構 石堤長光寺遺跡



1. 前期調査地区全景（北西）



2. 前期調査地区全景（南西）

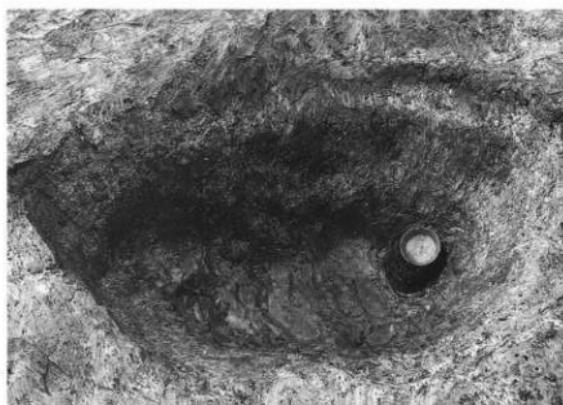


1. 後期調査地区全景（北西）



2. 後期調査地区全景（北東）

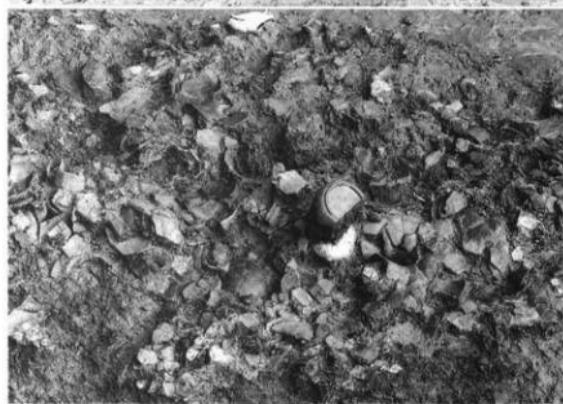
圖版三 遺構
石塔長光寺遺跡



1. 土坑SK01全景
(南東)



2. 土器窯SX01全景
(北西)



3. 土器窯SX01近景
(南東)

圖版四
遺構 石堤長光寺遺跡



1. 清S D01全景
(南西)



2. 須恵器出土状態



3. 須恵器出土状態



1. 通景（南上方）



2. 全景（上方）



1. 全景（北上方）



2. 全景（東上方）



1. 全景（西上方）



2. 全景（南東）

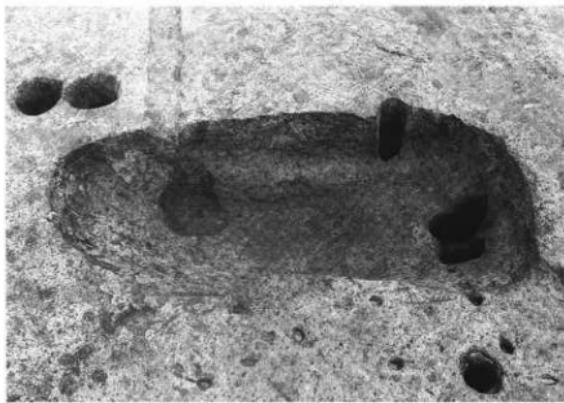


1. 土坑SK117全景(南京)



2. 溝SD50全景(南西)

圖版九
遺構
石塚遺跡



1. 土坑SK111全景
(西)



2. 土坑SK114全景
(東)



3. 土坑SK116全景
(南東)



1. 地震址 S X 48近景
(北西)



2. 土坑 S K 111遺物出土
狀態 (東)



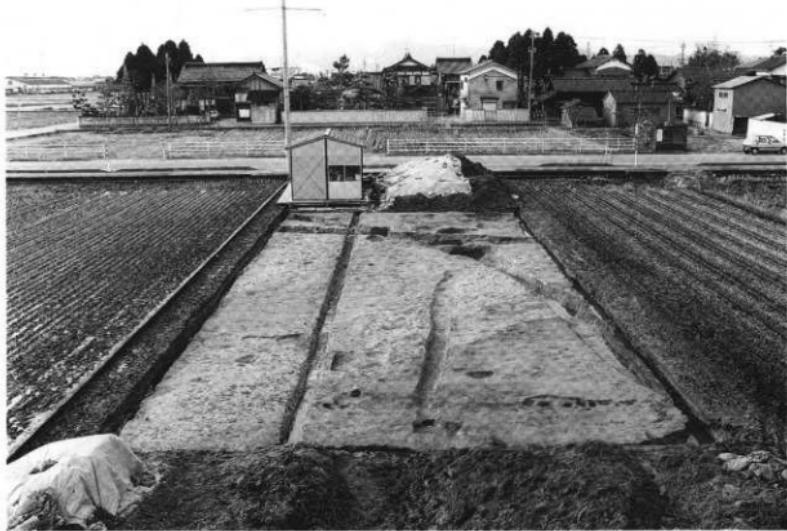
3. 凹地 S X 47遺出土
狀態 (東)



1. 遠景（南西上方）



2. 全景（上方）

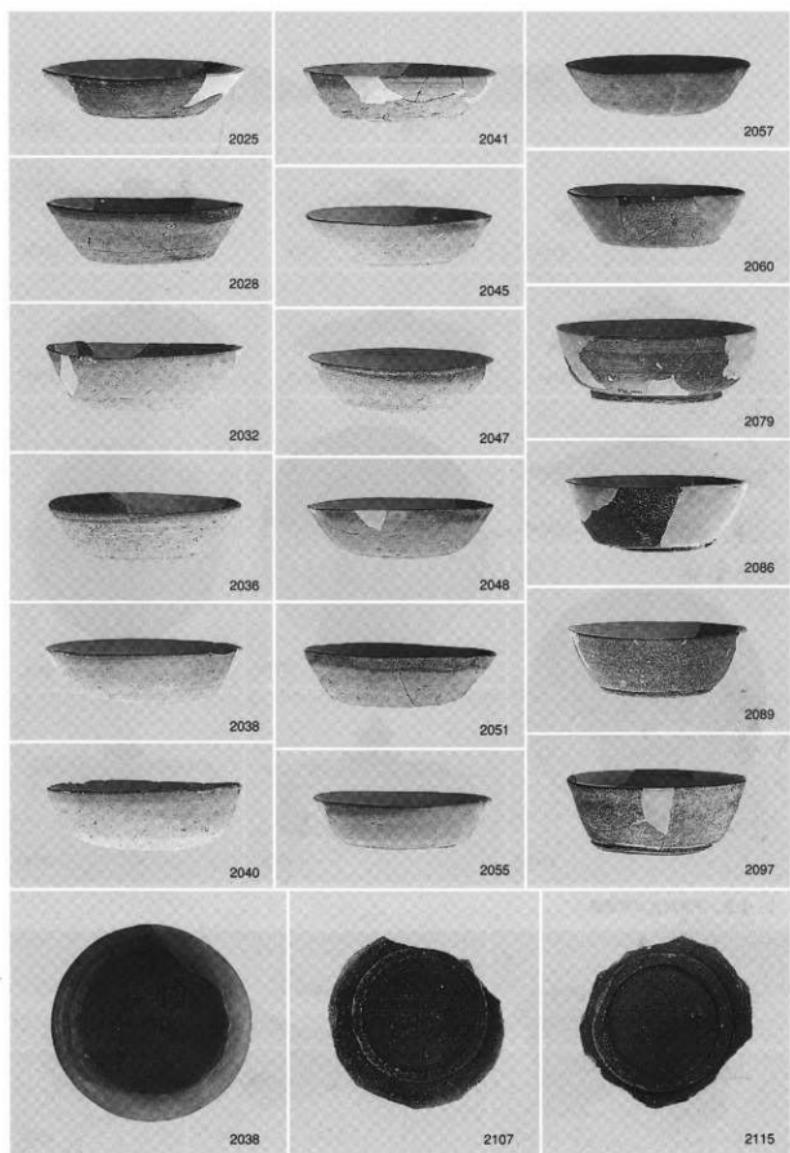


1. 全景（南東上方）

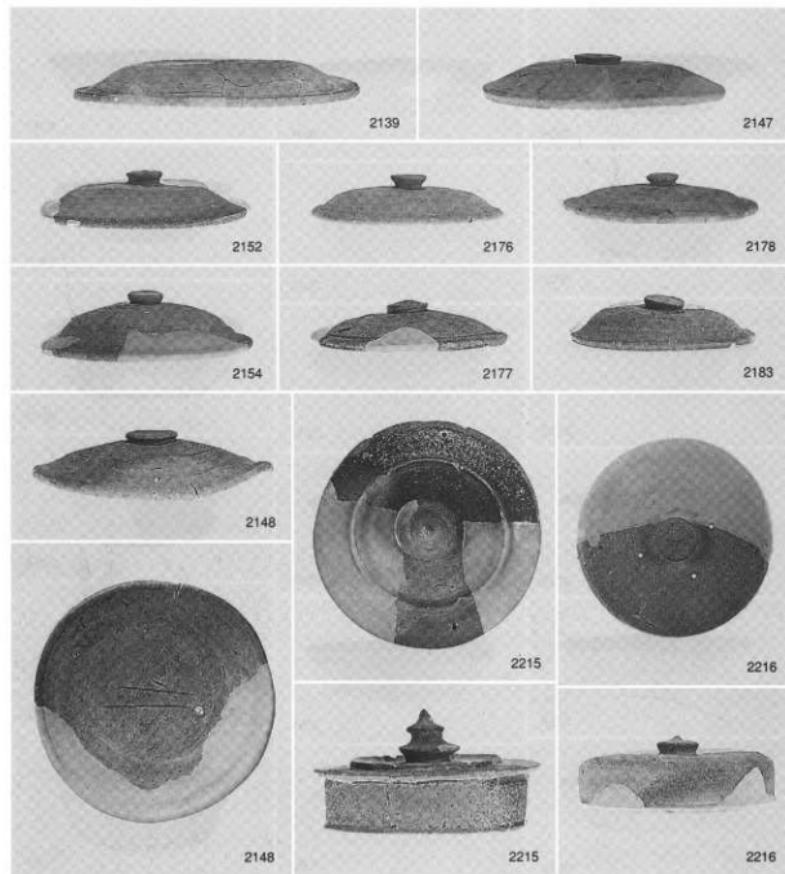


2. 全景（北西）

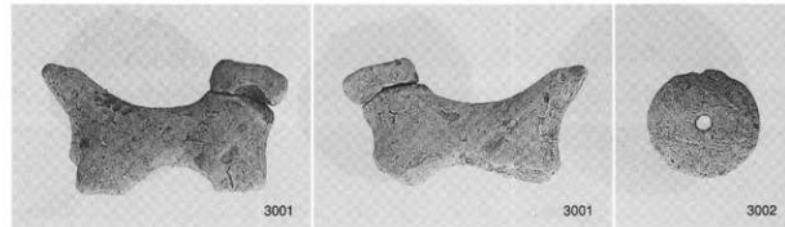
図版一三 遺物 石堤良光寺遺跡



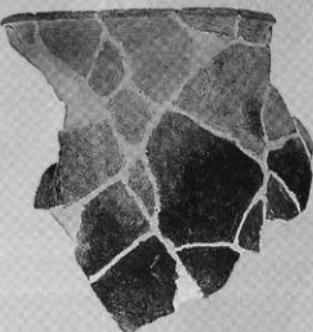
奈良・平安時代の須恵器

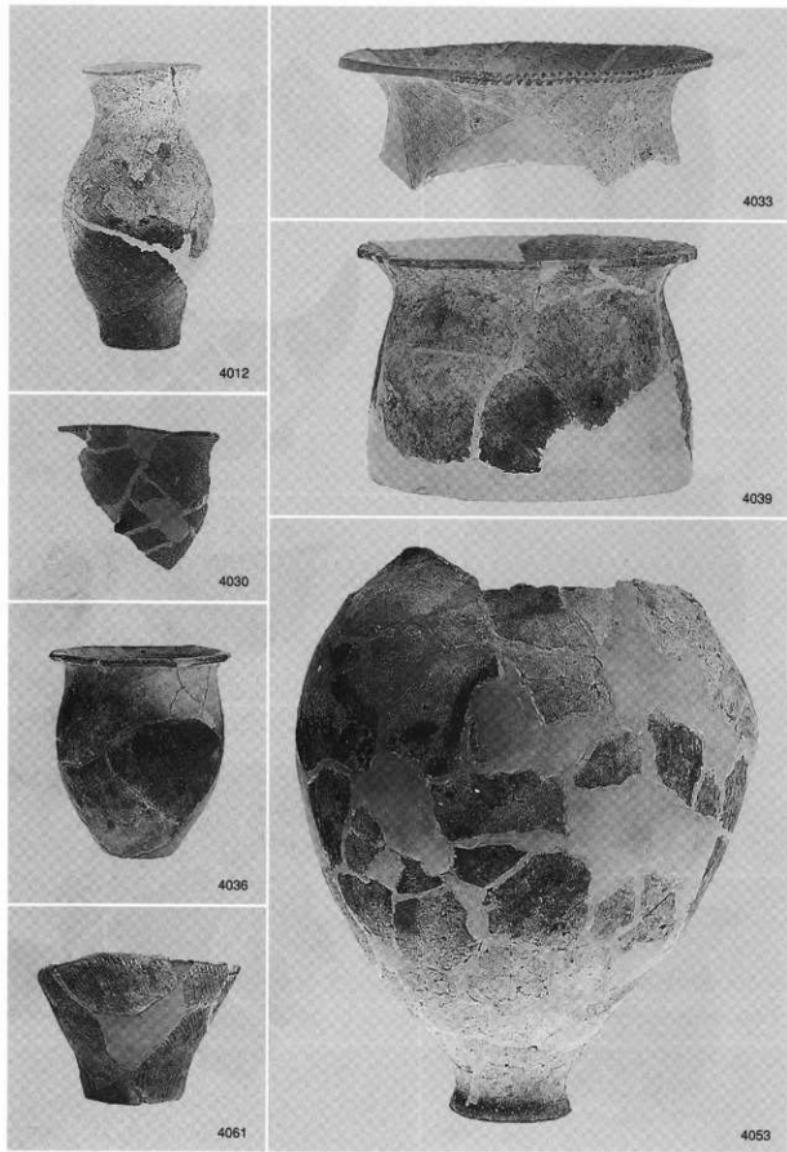


1. 奈良・平安時代の須恵器

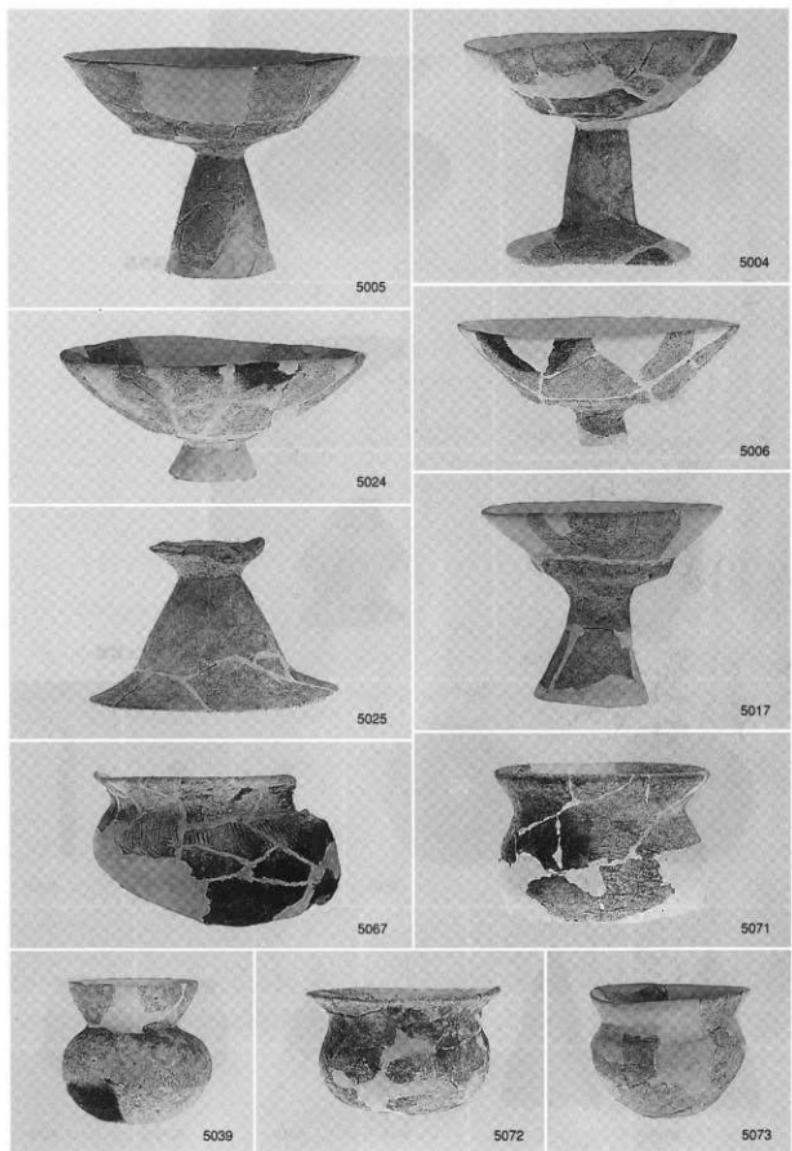


2. 土製品

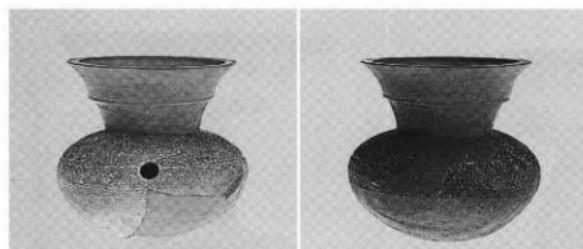




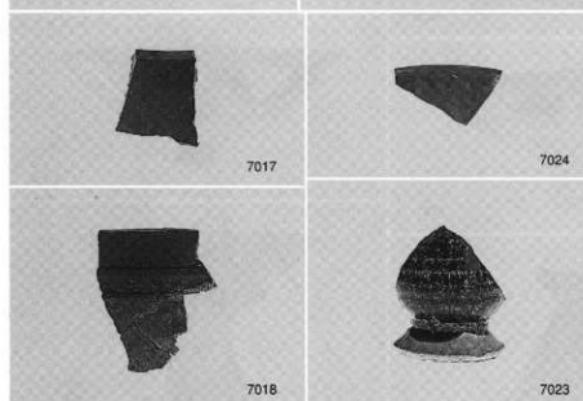
共生土器



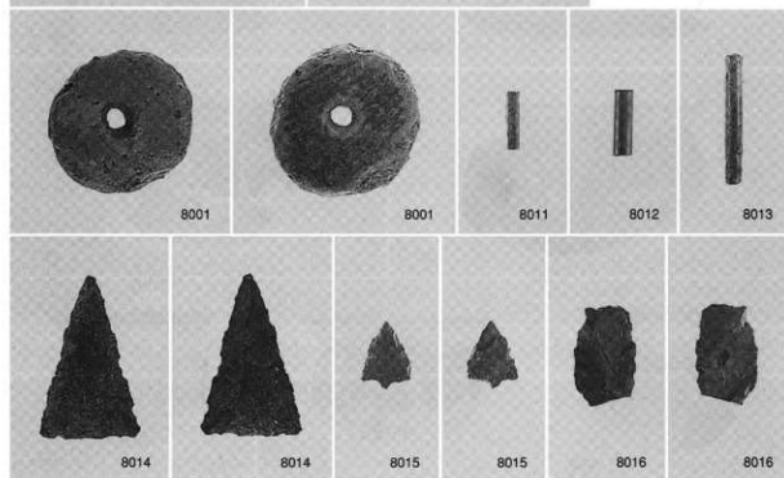
古墳時代の土師器



1. 須惠器



2. 中世土器類



3. 土製品、石製品

高岡市埋蔵文化財調査概報第30号
市内遺跡調査概報Ⅳ

発行者 高岡市教育委員会
富山県高岡市庄小路7番50号

1996年3月29日

印刷所 小間印刷株式会社
富山県高岡市利原町3
